第 1 日　10 月 15 日（土）

シンポジウム I（10:00～13:00）　　A 会場：大講義室 A

ハプスブルク神話とその規範をめぐって
Zum habsburgischen Mythos und seinem Kanon

司会：田中 まり
コメンテーター：松村 國隆

K. E. ショースキーの『世紀末ウィーン』や W. M. ジョンストンの『ウィーン精神』は，19 世紀後半から 20 世紀前半における多民族国家ハプスブルク帝国の豊かな文化遺産の再評価を企図しており，帝国末期に当たるこの時代に，ハプスブルクの文化が頂点に達したとする認識が，両者の論考の前提をなしている。だが他方で，C. マグリスが『近代オーストリア文学におけるハプスブルク神話』で提示したのは，20 世紀における崩壊をあらかじめ想定した「ハプスブルク的なるもの」としての文化遺産である。オーストリア文化の特徴と言われる，過酷な現実からの甘美な逃避とも言うべきこの伝統は，ドナウ帝国とも呼ばれた多民族文化圏が，内に抱えてきた異質な要素によって，いずれ必然的に崩壊せざるをえない。自らの文化遺産に反逆する姿勢に貫かれた同著は，オーストリア文化の伝統を一度は突き放し，離れたところからそれを客観的に考察するという視点から記されている。「あれから 30 年」と題された同著の 1996 年の新版（イタリア語）序文には，1963 年に初版（イタリア語）が刊行されたとき，この批判的な「ハプスブルク神話」が 68 年運動の前触れともなったことに言及されている。この時代にフランクフルト学派の批判的な思想と相まって，オーストリア文学に注目が集まり，オーストリア文学が一つの否定性の表現として受けとめられたことが執筆の背景にある，と。時代背景のなかで提示された批判的な「神話」は，ハプスブルクの地域的な枠組とともに，今日の視点から再検討する必要がある。

本シンポジウムでは，オーストリア文学・文化の規範をめぐる問題に，個々の発表者が各々の視点から取り組む。発表 1（磯崎康太郎）は，マグリスがハプスブルク郷土文学の範例とみなした A. シュティフターを取りあげ，言語の問題からシュティフターの「ハプスブルク神話」性を問い直す。発表 2（佐藤文彦）は，プロレタリア革命童話の作家 H. Z. ミューレンを取りあげ，ハプスブルク文化の国外への広がりのなかで，この文化遺産が反戦左翼思想のなかでいかにして描か

れたのかを考察する。発表 3（髙橋麻帆）は，H. バールの論説を拠り所にして，19 世紀オーストリアの伝統を体現する建築物であるウィーンのリングシュトラーセを取りあげ，ウィーン分離派の規範と革新の問題を論じる。発表 4（早川文人）は，H. ブロッホの初期および晩年のエッセイから，オーストリア文学／文化に対する批評を中心に取りあげ，そのオーストリア性について考察する。発表 5（元吉瑞枝）は，I. バッハマンと P. ハントケの作品を取りあげ，両作家のオーストリアの伝統や規範との対峙のありかたを検討する。このように 19 世紀から現代にいたるオーストリアの文芸を具体的に検討するなかで,「ハプスブルク神話」やオーストリア精神を現在の視点から問い直したい。

1. アーダルベルト・シュティフターと「ハプスブルク神話」 ― 喪失への不安

磯崎 康太郎

C. マグリス『近代オーストリア文学におけるハプスブルク神話』によれば，A. シュティフター（1805-1868）は，地方的なものを無意識のうちに神話化していくハプスブルク的郷土文学の作家である。ここで述べられた幻想，理想としての「神話」は，20 世紀にやがて没落の運命をたどるハプスブルク文化のことであるため，この指摘はシュティフターを 19 世紀のオーストリア文学史上に位置づけるものである。だが他方で，20 世紀のシュティフター研究において，シュティフター文学の病理学的な側面，視覚表現の偏重といった側面が注目され，ここではむしろ作品に潜む不安や恐怖が考察されている。本発表では，この流れに属する W. G. ゼーバルト『不幸の記述』におけるオーストリア文学の系譜を参照しながら,『水晶』等の作品に見られる言葉の「ぎこちなさ」が，類語反復や沈黙といった形をとり，作品世界の秩序形成に関与している点を検討する。だがこの秩序は，それを喪失することへの不安があるために,「ぎこちなく」描かれざるをえない。こうした喪失への不安感や描かれる対象を記述する言語の問題は，19 世紀末以降のいわゆる「言語危機」の問題にも大きく関係する。シュティフター文学は，郷土文学とは異なるもう一つのオーストリア性とも呼ぶべき，この言語の問題にいかなる形で直面し,「ぎこちない」言語表現はいかに類型化されるのかを考察する。

2. メタ文学としての 19 世紀オーストリア文学史記述
― ヘルミュニア・ツア・ミューレンの試み

佐藤 文彦

両大戦間期以降，プロレタリア革命童話および反ナチズムの作家として活躍したヘルミュニア・ツア・ミューレン（1883-1951）がイギリス亡命中の 1944 年に発表した『偉大な作家たちの小さな物語集』は，主として 19 世紀に実在したオーストリアの（偉大な）作家たちの生い立ちや代表作が書かれるまでの背景を描いた，いわば一種のメタ文学あるいは 19 世紀オーストリア文学史記述の試みとして読むことができる。この作品でツア・ミューレンは，グリルパルツァー，ライムント, シュティフターといった 19 世紀前半のオーストリア文学を代表する作家たちについて書くことを通じて，結果的に彼女もまたハプスブルク神話の形成に加担してしまったと考えられる。

本発表はツア・ミューレンがこれら「偉大な作家たち」と対峙する様の分析を通じて，20 世紀前半の反戦左翼の作家が異国にあって祖国の文学伝統の誇示や規範の形成に努めた拠り所はどこにあったのかについて検討するものである。C. マグリスにも取りあげられず，オーストリア文学の伝統にあっては規範というより異端の作家とすら言えるかもしれないツア・ミューレンと「ハプスブルク神話」のメタ的関係を考察する本発表は，かの神話の新たな一面を明らかにするものと位置づけられる。空間および思想上の境界を越えて記述が試みられたオーストリア文学史の一側面を，本発表を通じて提示したい。

3. リングシュトラーセにおける歴史主義
― ヘルマン・バールによる言説をめぐって

髙橋 麻帆

本発表では，ウィーンのリングシュトラーセを，オーストリアにおける伝統と規範を体現する造形物とみなし，それに対峙するウィーン分離派の姿について，H. バール（1863-1934）による言説を中心として考察する。リングシュトラーセは，ウィーンの中心部に位置する，オペラ座や議事堂等の公共建築物を含む環状道路であり，建築史上は歴史主義と呼ばれる時代の代表的な作品である。この歴史主義の時代にこそ，モダニズム建築の技術的な素地が築き上げられたものの，「歴史主義」という言葉自体には，非合目的的な「装飾」に溢れた時代という偏見がつきまとってきた。バールを始めとする，分離派運動の参加

者たちのリングシュトラーセ批判の言説は，こうした偏見の根源とみなせる。ウィーン分離派は，リングシュトラーセの前時代であるビーダーマイヤーの造形には肯定的であった反面，リングシュトラーセに対してはすこぶる否定的であった。しかし，1900年頃の彼らのテクストを詳しく見てみると，彼らは，リングシュトラーセ沿いの公共建築を設計した建築家たちには敬意を払っていたようである。彼らによって批判されたのは，賃貸集合住宅の装飾過多であった。一方で，1920年代のバールの言説には，公共建築物への批判が見られる。双方の時代のリングシュトラーセ批判を比較し，分離派による，伝統と規範への対峙の仕方について考えたい。

4. ヘルマン・ブロッホのオースリア文化批判

早川 文人

H. ブロッホ（1886-1951）は，ウィーン文化の中で学び育ちながらも，当時主流にあった耽美主義的芸術に批判的な姿勢を強く打ち出し，美ではなく認識を示すことこそが芸術の役割として，汎ヨーロッパ的視点から創作活動を行った。このようなブロッホの創作に対する姿勢は 20 世紀初頭のウィーンで起きた装飾批判から形成されたことが，初期のエッセイ群から読み取れる。装飾批判の言説から彼は，装飾に対する考えだけではなく，言語や市民道徳に対する批判的なまなざしを学んだのであった。その後，職業作家へ転身し，亡命するまでのブロッホは，オーストリアの政治／文化に関する言及は概して少なかったが，晩年になってアメリカで執筆した『ホフマンスタールとその時代』において，1860 年から 1930 年までのウィーン市民文化と正面から対峙した。このエッセイで彼は，西洋において進行する「価値崩壊」の中心をウィーンと見なし，いわばハプスブルク的オーストリアの伝統の清算を試みたのだ。

本発表では，ブロッホの長編小説では前景化されなかったオーストリア性が，創作原理に深く関与していることを初期のエッセイの分析から指摘する。さらに『ホフマンスタールとその時代』を読み解くことで，彼のオーストリア文学／文化批判の観点を探り，ブロッホが捉えるオーストリア文学の規範について考察する。

5. 「神話」との対峙
― インゲボルク・バッハマンとペーター・ハントケ

元吉 瑞枝

I. バッハマン（1926-1973）も P. ハントケ（1942- ）も，オーストリアの範疇を越えて 20 世紀後半に現代の社会や人間を表現した作家であり,「ハプスブルク神話」とは直接つながらないようにみえる。実際，この両作家と「ハプスブルク神話」とのあいだには，モデルネに端を発する，言語への強い問題意識と，各々の人生の始まりにおいて体験した第二次世界大戦の記憶が，亀裂をなすように介在している。しかし,「ハプスブルク神話」やその幻想は，C. マグリスの指摘するように，帝国崩壊の後にも，或いはむしろその後にこそ長く浸透し，生き続けたとすれば, バッハマンやハントケにとっても,「ハプスブルク神話」やその影響下にあるオーストリアの伝統や規範と対峙することが求められたはずであり，彼らの方でもそれを意識していた。

しかし，バッハマンとハントケでは，オーストリア像や「ハプスブルク神話」との距離をめぐって違いもみられる。本発表では，このような両者の差異と，他方で認められる両者の共通点や接点を探り，生地や出自の境界性をめぐるテーマ，第二次世界大戦の痕跡，さらに言語への問題意識と表現の方法などを，各々の作品（バッハマン『湖への三つの道』, ハントケ『なおも嵐が』など）を通して検討し，彼らにとっての「神話」や規範との対峙のありかたを考察したい。

シンポジウム II（10:00～13:00）　　B 会場：AV 講義室

「入門文法」― よく説明・理解できていないこと
― テキスト理解を助ける中・上級文法の試み
Kardinalgrammatik – gravierende Ratlosigkeit. Versuch einer Abhilfe zum besseren Textverständnis als Mittel- und Oberstufengrammatik

司会：井出 万秀

本シンポジウムでは「『中・上級文法』では，どのようにして言語使用の実際や言語使用から理解されるべき内容を説明したらよいか」を提言する。日本人ドイツ語学習者が一般の教科書で説明されているような「入門文法」の知識を備えていても実際のドイツ語の言語使用，特にテキスト理解において自動的に理解できない，あるいは無視して

しまう現象（例えば，代名詞類や冠詞類など）が少なくない。こうした言語現象は，形態的な規則を説明することが中心となる入門文法の教科書においては，十分に説明しきれないのが現実である。形態的規則を超えて実際のテキスト理解の際に手助けとなるような文法をここでは「中・上級文法」と捉える。たとえば代名詞や冠詞類は，一見簡単な解説で終えることができそうな現象ではあるが，実際の言語使用において，未だ綿密な説明がなされていない複雑な機能を担っており，読解・作文の際の正確な理解・使用は難しい。本シンポジウムでは，再帰代名詞，人称代名詞，関係代名詞，指示詞，名詞合成語の 5 つの言語現象を例にとって，実際のテキストを中心とした言語運用上の機能と仕組みを明らかにしていく。具体的には，テキスト理解のための「入門文法での文法事項から理解されるべき内容」を明らかにし，ここで扱う言語現象ごとに，言語情報処理モデル内において必要とされる知識の位置づけを提唱する。「言語情報処理モデル」とは，「言語理解過程」の各段階，言語情報を保存する「記憶（長期記憶・短期記憶）」，そこにある言語理解過程の各段階で必要とされる（または呼び起こされるべき）「知識（言語知識，テキスト知識，世界知識）」の相互関係をモデル化したものである。この言語情報処理モデルに基づいて，「中・上級文法」は言語（テキスト）理解の過程において必要とされるさまざまな知識とそれらの相互関係をどう説明したらよいかについて検討する。

1. 再帰代名詞の再帰・相互用法の解釈について

宮下 博幸

入門文法において再帰代名詞が取り上げられる際，再帰的用法と並んでしばしば挙げられるのが再帰代名詞の相互的用法である。相互用法は次のような例によって説明される。

(1) Thomas und Anna lieben sich.

説明の際には主語が複数となることがしばしば付記されるが，実際のテキストにおいては，次のように主語ならびに定動詞が単数で現れることもまれにある。

(2) Als die Familie sich geküßt, sich umarmt hatte ....

また主語ならびに定動詞が複数であっても，次のように再帰代名詞が再帰的に解釈される場合もある。

(3) Wir sehen Menschen an, ob ihnen Spaß macht, was sie tun – oder nicht. Menschen mit Charisma lieben sich, das, was sie tun, und das Leben.

このような例の存在は，入門文法の説明のみでは，実際のテキスト解釈を行うのに十分でないことを示している。本発表では入門文法の説明では対応できないケースにはどのようなものがあるのか，このような解釈の問題が実際のテキストでどのように処理されているかを，コーパスに基づく調査によって示したい。実際のテキストでは，曖昧さが生じる場合にはそれを避けるための手段が用意され，そのような手段がない場合には，聞き手・読み手のさまざまな知識との関わりで解釈が導き出される。そのような知識としては，言語コンテクストの知識，文法知識，命題知識，百科事典的知識が想定可能である。これらの知識の相互作用により，聞き手・読み手はある解釈へとたどり着くことができる。また関与するそれぞれの知識が，Schwarz（2008）が挙げる記憶モデルとの関わりでどのように捉えられるかも示したい。

2. ドイツ語テキスト読解における人称代名詞の日本語への置き換え
—「ドイツ語は文法，日本語は文脈」？

山本　恵

本発表は，人称代名詞がドイツ語と日本語のあいだで，言語形式上どの程度明示されるか，ドイツ語文学作品（Franz Kafka: *Vor dem Gesetz*, *Im Dom* in: *Der Prozeß*）とその日本語翻訳（刊行済み 11 作品）の対照分析から観察する。その結果から，ドイツ語人称代名詞を日本語へ置き換える際に作用する，日本語テキスト構造原則と文法について考察する。ドイツ語は，文レベルでの「文法」を堅持し，主語や目的語を代名詞という形で明示するが，日本語は，「文脈」から何を指しているかがわかれば，それを代名詞のような形態に反映しなくてもよい。

（1）Er fragte sich, ob er antworten soll.
返答すべきかどうか彼は迷った。『独和大辞典』

異なる構造の両言語を翻訳等で置き換える際，1）どのような条件下で代名詞の訳出・非訳出（省略）が取捨選択され，2）省略の場合どのような原理のもとドイツ語の照応関係が反映させられているか，具体例と仮説を提示する。この分析は所謂「翻訳批判」と違い，ドイツ語に対する「日本語的な反応」が観察対象である。

ドイツ語テキスト読解時，学習者は特に 3 人称代名詞の指示対象把握に困難をきたす。文や文章の構造や内容が複雑化する一方，代名詞（所有冠詞も含む）が示す照応関係に注意を払い，同時に結束性を記

憶しておかなければならないからだ。テキストには，文単位での文法で習う原則を凌ぐ応用型が実際多く存在する。それに対処する技術を，日独の言語構造における違いから言語学的かつ体系的な説明を試みる。

3. 第二言語獲得における関係文分析 ― 先行詞の冠詞類と関係文

マヌエル・クラウス

関係文については，関係文を制限的・非制限的用法や韻律などの特定のトピックに限られる傾向がある（Eisenberg 1999, Holler 2005, 2007, Birkner 2007）が，本発表では関係代名詞と関係代名詞の先行詞（＝名詞）の関係に注目し，1）先行詞がある文の種類，2）先行詞の文中での位置，3）先行詞の定・不定，4）先行詞の数，5）先行詞が付加語とともに現れるかどうか，6）関係代名詞と先行詞が接触配置にあるか，7）関係文による文の中断があるか，8）先行詞および関係代名詞の格，に基づき，Ide 2009（208 使用例）と Kraus 2010（1055 使用例）におけるコーパス用例を分析する。この分析からは，「先行詞が不定（単数および複数），付加語をともなわず，主文の中域にあらわれ，関係代名詞と接触配置にあり，文の中断がなく，先行詞・関係代名詞ともに主格であらわれることがもっとも顕著である」という傾向が観察される。この典型的な出現パターンは *Es war ein Satz, der deutlicher kaum hätte ausfallen können* に凝縮されている。

さらにこの結果を認知的な背景（Rösler/Röder/Streb 2003）と関連づけるならば，特に先行詞の不定性（全用例の 60%強）は，関係文の制限的・非制限的用法の一義的な区別を可能にし，関係文をめぐる情報構造や読者のテキストに対する注意に影響を及ぼすと推測されるため注目される。関係代名詞の出現パターンが特定のパターンに限られることは，パターンごとの頻度（出現期待値）に基づいた記述などの形で中級・上級文法での新たな記述を可能にする。

4. 指示詞の機能について ― dieser と der を例に

三瓶 裕文

本発表の目的は，「テキスト理解を助ける中・上級文法の試み」という観点から， 指示詞（dieser と der）の主な機能ならびにそれらが生じる仕組みを素描， 例証することにある。今日でも指示に関わる最も重要な文献と目されるのは Bühler（1934）である。ドイツ語教育にも

目配りをした研究には Ahrenholz（2007）がある。以下に 3 つの認知的特性と，それらから生じる指示詞の機能を点描する。

I.＜近ければ近いほど直接的＞対象に視点が近接⇒対象を直接的知覚

II.＜心的視点の移動可能性＞心的視点は時空を超えて対象近くに移動可能。

III.＜共同注意(joint attention)＞（Tomasello 1999 など）
相手と共に同じ対象を見ることを意図して，「指さし」や「視線」により，相手の注意（視点）を自分が見ている対象に誘導。

指示詞の機能：強い心的態度表明，共同注意の実現

・強い心的態度，感情の吐露

・「聞き手（読者）」が指示対象を特定する（identifizieren）ことの助け

・強調（前景化）

・共体験―「読者」も作中世界にいわば「臨場」，作中人物の知覚や内心を共体験。

なお，入門文法では dieser は「この」とされるが，dieser「あの」となる場合があることについても言及したい。

5. 辞書にない語をいかにして理解するか
―「テキスト語」としての名詞合成語 ―

磯部 美穂

テキスト理解を助ける文法現象の理解を扱う本シンポジウムにおいて，本発表では入門文法ではあまり扱われないが，実際の言語使用（特にテキスト構成）において使用頻度の高い名詞合成語を研究の対象とする。「テキスト語」とされる名詞合成語の解釈には，他の発表で扱われる言語現象の理解に比べ，言語知識以外の知識がより重要な役割を担っていることを指摘し，テキスト読解の一方法論を検討する。

名詞合成語の中でも複合的な意味内容を含む動作・状態を表す語を基礎語とする合成語に関して，そのテキスト構成上の機能と語形成の仕組みを検証していく。この合成語は，前方にある文中の述部内容を名詞的に再表現したもので，コンテクストと緊密に関連した意味内容を表す。

Fluggesellschaften achten penibel darauf, dass möglichst jeder Sitzplatz in einem Flugzeug verkauft wird. Eine solche Profitmaximierung plant der US-Konzern Boeing nun auch bei Flügen ins Weltall.

(Spiegel Online: 15.09.2010)

例えば，学習者が *Profitmaximierung* のような合成語を理解する際には，［各構成語の形態的・意味的認識］，［構成語間の論理的意味関係の認識］，そして前方にある［コンテクスト内の結束性の認識］の 3 つの過程を経ることになる。しかしこの理解過程は，構成語の意味や文法に関する言語知識だけでは十分に遂行されない。本研究では，合成語のテキスト内での形成位置，文中での位置，冠詞や付加語の有無と種類に関して分析をおこない，名詞合成語理解のために必要とされる言語知識，コンテクスト知識，世界知識の相互関係の類型化を試みる。

口頭発表：語学 1（10:00～12:35）　　D 会場：101 講義室

司会：保阪 靖人，河崎　靖

1. ポーランド語におけるドイツ語由来の語彙

渡辺 克義

現代ポーランド語には 3, 4 千のドイツ語由来の語彙があると考えられているが，このうち 2 千語程度が日常語（高頻度使用語彙）としてランクされている。本研究は，歴史的に見た場合に，特定分野（領域）のドイツ語語彙が一定の時期にまとまってポーランド語に入ったきたことを具体的・実証的に示すものである。

18 世紀以前 ― 生活関連語彙を中心に多くのドイツ語語彙がポーランド語に流入（例：burmistrz < *Bürgermeister*）。19 世紀 ― 分割当事国のプロイセン・オーストリアがドイツ語を強制。ポーランド人は抵抗の姿勢を見せるが，結局は翻訳借用として多数の語彙が入った（例：czasopismo「czas（時間）＋ pismo（書類）< *Zeitschrift*」）。第二次大戦時 ― ドイツ語由来の多くの軍事用語が用いられたが，現在，一般語彙として残っているものは少数（例：ausweis < *Ausweis*）。戦後 ― 外来語の主流は英語で，ドイツ語由来のものは数十語にすぎない（例：wihajster「…とかいうもの」〔名称を失念した時に使用される〕< *Wie heißt er?*）。

本報告に関連する研究は，ドイツやポーランドでも意外に少ない。W. Kaestner, Die deutschen Lehnwörter im Polnischen, Leipzig 1935 は先駆的研究であるが，音声学的分析に終始しており，未完に終わっている。M. Łaziński, Słownik zapożyczeń niemieckich w polszczyźnie［ポーランド語におけるドイツ語借用語辞典］, Warszawa 2008 は貴重な資料であるが，各語の流入背景について十分な考察が加えられていない。

2. 西ゲルマン語の verba pura における語幹末の w の起源について

下嵜 正利

西ゲルマン語の verba pura における語幹末の w の起源については，これまでに，サンスクリットに見られる verba pura 完了形能動態 1・3 人称単数形における-u と関連付ける説，*sē[1]jan の 1 人称両数過去形に由来するとする説，語幹と語尾の母音の間に生じた渡り音とする説がある。1 番目の説は，印欧祖語の-ōu-をゲルマン語の-eow-と音韻法則により結びつけるのが困難であるため，支持できない。2 番目の説についても，*sē[1]jan というたった 1 つの動詞のしかも使用頻度の低い形態から w が拡散したとは考えにくい。w は渡り音とするのが妥当と思われるが，その場合問題となるのが，どの形態においてそれが生じたかである。現在語幹及び過去分詞の語幹は，わずかな動詞を除いて，音韻的に考えにくい。それに対し，過去語幹に母音で始まる語尾が続く形態ならば，verba pura の過去語幹の母音は本来 eo であったと考えられるので，w の発生は，Holtzmann の法則と同様の音変化として説明可能である。同様の説は，すでに K.-H. Mottausch が唱えているが，しかしながら発表者と Mottausch の間には，強変化動詞第 7 種のアプラウトの成立過程に関する考え方が異なっており，そのため，w がどの動詞の過去形で生じどのように拡散したかということについても相違が生じている。

3. メタファー・メトニミーから見る意味の変化
— 形容詞の意味変化を例証として —

薦田 奈美

本発表で扱うのは，意味変化である。Nerlich and Clarke（1992）によれば，意味変化現象の伝統的な記述方法には問題がある。時代ごとに一般的とされる意味を列挙するだけでは，種々のコンテクストによって微妙な差異を持ち得る意味を，統一的にカテゴリー化してしまう。このような問題の解決に有用であると考えられるのが，人間の認知活動の観点から意味変化を捉えて記述する方法である。

従来，同様の過程を経た変化として見做されてきたような意味変化例について，その差異や類似点をより具体的に示し得る記述方法を提示することが，本発表の目的である。語の意味を，実際に語が使用される場面の中で初めて実現されるものと位置づけ，言語使用者が外界

の事物や現象をいかに理解し，言語化するかという過程に，意味の本質が存在していると考える。それゆえ，意味変化現象も，通時的現象としてだけではなく，人間の認識と理解という認知的機能の現れとして捉え直す必要がある，という立場をとる。
本発表では，形容詞の変化について，認知システムに基づく記述方法を用いて分析を行う。例えば，gut や schön，stark，klein など，一般的な形容詞の多くに量の概念における用法が見られるのは，それぞれの概念と量の概念とのメタファー的関係性が存在していることによるものである。本発表では，メタファー・メトニミーという修辞的表現そのものではなく，あくまでもこのような修辞的表現を理解し，また産出するための，根本的な認知活動が，語を新たな意味で使用する過程にいかに関わっているか，という点を明らかにしたい。

4. 言語懐疑の類型論の試み

室井 禎之

言語と認識の関係は古代ギリシャ以来，言語についての省察の大きなテーマである。近代以降両者の関係は疑問に付されることが多くなり，言語懐疑と呼ばれる，言語が事物や真理の認識に役に立たない，それどころか認識をゆがめさえするものである，とする思潮が強く現れてくる。

本発表では，主として世紀転換期から 20 世紀前半の作家・詩人による言語懐疑の背景にある言語観を分析し，それらを言語と認識の問題圏のなかに位置づける。その結果，言語懐疑の種々相は，言語記号の抽象性に対する評価と言語の機能についての考え方という二つの軸をめぐって展開していることを明らかにする。

一つ目の軸は,「言語はどのようなレベルの事物に対応している（べきである）のか」という問いに対する言語使用者の信念がその言語観を規定しているということである。理念形を求める立場がある一方，現実の一回的個別性を表しえないことへの不満がしばしば表明される。他方の軸では，言語懐疑は言語による認識を拒絶する傾向をもつが，その際往々にして言語のコミュニケーション機能を敢えて貶めるような言説がなされる，という傾向に着目する。言語懐疑の方向性と強度は，あらかじめ言語の機能をどのように措定するかによって，異なった様相を示す。

言語懐疑についてのこうした類型論は同時に，言語懐疑の問題設定と言語研究の対象設定とがしばしば類似の構図を有していることをも

示すことになる。それは言語と認識，あるいは言語そのものへのアプローチをめぐる議論を整理する際の一助になるであろう。

口頭発表：文化・社会 1／文学 1（10:00～12:35）

E 会場：103 講義室

司会：河田 章子，吉道 悦子

1. シラーの美的教養の理念と 19 世紀におけるその影響

石澤 将人

19 世紀ドイツにおける教養の理念は，絶えずその理想として古代ギリシアを参照してきた。ヴィンケルマンから初期ロマン派へといたる 18 世紀後半という時代は，このギリシア像の形成に決定的な影響を与えた期間である。中でも F. シラーは，この流れの中で中心的な役割を演じた人物と言える。彼はギリシアに取材した作品を書き残す一方で，その理想的な芸術が人間の教育に及ぼす作用，すなわち「美的教養」の理念についても論文にまとめている。しかし，「ギリシアの神々」をはじめとする詩において彼が描いた人間と神々が親しく交わる明朗な世界は，J. ブルクハルトによるものをはじめとして，19 世紀後半においては痛烈な批判にもさらされている。ニーチェの教養批判もこの系譜に連なっていると言える。

本発表ではまず，シラーの一連の美学論文を中心テクストとしながら，彼の詩作にあらわれたギリシア観を分析する。シラーは単純にギリシアを過度に理想化していたわけではなく，そこには彼なりの同時代文化への批判が込められていたことは明らかであり，この方法はまさにブルクハルトやニーチェのものと同型である。そしてその一方で，シラーはギリシアの限界をも指摘しているのである。それにもかかわらず，なぜシラーは単純なギリシア賛美者のごとく扱われ，批判されたのか。W. v. フンボルトらによって唱えられた古典語学習による形式的教養の理念と対比しつつ，この点についても検討したい。

2. 夫婦愛と Einsamkeit
― ティークの『生の余剰』における Einsamkeit のモティーフ

山縣 光晶

ルートヴィヒ・ティークの『生の余剰』„Des Lebens Überfluß“ の先

行研究は，詩的に昇華された世界と散文的で面白みのない日常性のコントラストと調和，社会・政治諷刺，文学の商品化への批判等の観点からなされている。しかし，主人公夫婦の Einsamkeit における生を扱った作品にもかかわらず，これに着眼した研究は，ほとんどみられない。

テクストは,階段に使われる木材やチョーサーの稀覯本に託して「余剰」とはいかなるものかを描く。夫婦の対話と愛は,「余剰」のシンボルであり，外部世界との橋渡しのメタファーでもある階段が徐々に薪として燃やされることで，すなわち，Einsamkeit の外形的な状況が拡大し，深化するのに比例して,「余剰」がそぎ落とされたかのように純化し，深まっていく。二人の夫婦愛の深化は Einsamkeit なしには成立しえない。『生の余剰』における Einsamkeit は，対話に基づく肯定的な Einsamkeit であり，今日我々が通常念頭におく生に否定的な孤独とは様相を異にするものである。それは，パラダイスにも例えられる幸せと充足感に満ちた Einsamkeit である。このノヴェレは，Einsamkeit が生にとってなくても済むもの，余分なものではなく，生に必要不可欠なものであり，生を営む上でそうした時期があることをフモアー豊かに提示する。

本報告は，Einsamkeit のモティーフと夫婦愛のコンテクストで作品解釈を試みるとともに,『金髪のエックベルト』における Einsamkeit のモティーフやロビンソン・クルーソーに託された啓蒙思想期の典型的な Einsamkeit 観などと比較しつつ,『生の余剰』に提示された Einsamkeit の意義を考察するものである。

3. E. T. A. ホフマンの Märchen の独自性 —『マイスター・フロー』を中心に

小﨑　肇

『マイスター・フロー』(1822) は副題に「メールヒェン」(Märchen) と添えられており,「ホフマンのメールヒェン」と呼ばれる作品群の一つである。しかし,この副題は必ずしも作品の形式に合致していない。物語内の現実は，作中での不思議な出来事を当然のものとして許容しないからである。

このような不思議な出来事は，物語内の登場人物（たち）によって語られる物語がその根源となっている。作中で語られるこれらの物語内物語は断片的なものだが，動物や植物が当然のようにコミュニケーションをとるメールヒェン的世界である。

この二つの世界が曖昧に重なることで，作中の不思議な出来事は超自然的な「ありえないこと」を示す「幻想的なもの」を可能にしている。そして「ありえないこと」を当然のこととして示すメールヒェンと，非現実のこととして示す「幻想的なもの」が混ざり合うところにホフマンのメールヒェンの核がある。メールヒェン世界の無制限な法則が現実世界で起こることで，通常なら見ることのできない現実の諸相を可視化するからである。このように，元来のメールヒェンを乗り越えて，現実の中にひそむものを見通す効果が「ホフマンのメールヒェン」のもつ特徴である。

4. Brille, Fenster, Lid und Augenbinde. Von der Sichtbarkeit zur Unsichtbarkeit als Metapher der Wahrheit bei Kleist

Michael Mandelartz

In einem seiner letzten Briefe bezeichnet Heinrich von Kleist sein Leben als „das allerqualvollste daß je ein Mensch geführt hat“. Vermutlich lag das nicht zuletzt daran, daß er den Widrigkeiten, denen er ausgesetzt war, immer wieder das Recht des Menschen auf Glück entgegengehalten hat. Das Glück dachte der junge Kleist sich im Anschluß an die Aufklärungsphilosophie als Zugang zur Wahrheit durch Tugend. Nachdem dieser unmittelbare Zusammenhang in der sog. ‚Kantkrise’ zerbrochen war, konnte er jedoch nur noch über Umwege und in paradoxen Konstellationen hergestellt werden. Der Vortrag erläutert Ausgangspunkt, Krise und Lösungsmöglichkeiten des Problems anhand der optischen Metaphern in Kleists Briefen und Werken. Der Weg führt dabei vom unmittelbaren Gefühl für die Einheit von Welt und Subjekt zur völligen Unerkennbarkeit der Welt. Sie provoziert schließlich den Rückzug des Subjekts auf sich selbst, den Verzicht auf die Welt, den Tod. Im freiwilligen Tod, so läßt sich aus den letzten Werken und Briefen schließen, glaubte Kleist schließlich doch noch der Wahrheit habhaft zu werden.

口頭発表：ドイツ語教育（10:00～12:35）　　F 会場：104 講義室

司会：Ruth Reichert，太田　達也

1. CEFR 準拠教材の語彙リストをめぐる問題点と展望

小笠原　藤子，真道　杉

日本において，特に初級レベルの学習者によるドイツ語基本語彙集

への要望は絶えない。様々に趣向を凝らした語彙集が書店に並ぶ中，発表者らも数年前に日本の学習者に向けた「欧州言語共通参照枠」（以下 CEFR）準拠の基本語彙集作成に着手した。CEFR に準拠し，体系的な作業の結果としていち早くドイツ語圏で出版された *Profile Deutsch*（Globaniat u.a., Langenscheidt 2001/2005）については，その使いづらさや基準データとして使用する際の語彙の偏りが指摘されているが，現在その代替データは存在しない。

発表者らは，日本での CEFR 準拠語彙集作成にあたり，*Profile Deutsch*（特に A1，A2 レベル）に依拠しつつも，場面ごとに語彙を批判的に検証し，日本において必要な語彙を選択，補充した。具体的には *Profile Deutsch* と，CEFR 準拠教材で採用されている語彙や CEFR 準拠の頻度順語彙リスト *Deutsch als Fremdsprache nach Themen*（E.Tschirner, Cornelson 2008）を比較検討した上で客観的に語彙選択する方法をとった。また，日本で出版されているコミュニケーション主体の教科書も参考に，ヨーロッパとは環境の違う日本の学習者にとって必要な語彙の検証も試みた。これにより *Profile Deutsch* に見られる語彙の偏りの改良を目指した。

このような作業データの一部を公表し，作業において浮彫にされた問題点を提示することで，今後のドイツ語教科書執筆や授業展開などにおける語彙選択作業の一助となることを期待している。

2. 文系学術テキストに見られる文体変異：品詞頻度と語彙頻度に基づく分類と判別を通して

今道 晴彦

学術ドイツ語研究では，文系理系の違いが議論される一方で（Schröder，1988），文系間のジャンル差は過小評価されがちである（Wiese，2001）。また，文系理系に基づいてドイツ語のクラス編成（の一部）を行う大学もあり，一般に専門語を除いて，文系間の差が問題にされることはまれであるように思われる。

本発表では，品詞頻度と語彙頻度を元に，コーパス言語学の観点から文系学術テキストの文体差を検証し，教育的示唆を得ることを目指す。具体的に取り上げるリサーチクエスチョン（RQ）は，1）文系論文の等質度はどの程度か，2）品詞頻度によると各分野はどう分類されるのか，3）各分野を特徴づける品詞は何か，4）個別論文の判別は可能か，5）判別に寄与する語は何か，である。

分析には 6 分野の文系論文からなる論文コーパスを使用し，RQ1 で

は，品詞出現率による相関分析と，語長，文長，リーダビリティ値の算出を，RQ2・3 では，クラスター分析と対応分析を，RQ4・5 では，判別分析を行った。

その結果，RQ1 では，各分野の相関が非常に高い値を示す一方で，社会系テキストのリーダビリティ値が極めて低い値を示した。RQ2・3 では，人文系と社会系のスケールが見られ，前者は機能語中心の品詞が，後者は名詞関連の品詞が特徴的な値を示した。RQ4・5 では，頻出動詞 20 語を元に哲学, 歴史学, 経営学論文の判別を試みた結果, 73.3% の確率で判別が可能となり，8 語の基本動詞が判別に寄与することが判明した。

以上より，文系間にも文体差があって，人文系学習者は機能語の習得，社会系学習者は語彙サイズの拡張が，学習指導上重要になる点が見て取れる。

3. Welche Wirkungen hat die Markierung von Akzenten in Lehrmaterialien auf eine spontane Konversation bei japanischen Deutschlernenden der Anfängerstufe?

Markus Rude

Die verschiedenartigen Funktionen von Prosodie sind Gegenstand linguistischer Forschung (Informationsstruktur: Féry; Konversationsanalyse: Uhmann; Bedeutungseinheiten: Peters). Ihre explizite Behandlung in Lehrmaterialien wird dieser Multi-Funktionalität allerdings nicht gerecht. Implizit ist Prosodie zwar in zugehörigen Audio-Lehrmaterialien enthalten, wird aber von visuell orientierten Lernenden nicht ausreichend wahrgenommen. Die These lautet, dass eine Visualisierung von Prosodie in Anfängerlehrmaterial den Erwerb der Akzentuierung des Deutschen unterstützt. Ein Argument hierfür ist theoretisch: Werden Akzente auch visuell dargestellt, könnte die zusätzliche visuelle Modalität das auditive Erkennen erleichtern. Das zweite Argument ist deduktiv: Nachweise der Wirkungen von Visualisierungen auf Dauerphänomene und Tonhöhenkonturen liegen vor. Da Akzente weitgehend durch Dauer, Tonhöhe und Lautheit von Silben realisiert werden, ist auch ein Einfluss auf die zusammengesetzte Größe „Akzent“ zu erwarten. Ein drittes, empirisches Argument entstammt einem Versuch: Drei Lernergruppen erhielten eine Liste von Fragen zum Auswendiglernen. Dann trafen in jeder Gruppe je zwei Lernende zufällig aufeinander, die mit diesen Fragen kommunizieren

sollten. Gruppe 1 hatte einen Fragekatalog ohne Akzentmarkierungen erhalten, Gruppe 2 denselben Katalog, in dem Haupt- und Nebenakzente durch Unterstreichungen markiert waren (symbolische Markierung); Gruppe 3 erhielt die Fragen in „prosodischer Schrift“, einer kurvig-bauchigen Verschriftungsform (nicht-symbolische Markierung). Der Vortrag führt in die Thematik ein und beschreibt Versuch und Versuchsergebnisse.

4. シャドーイング訓練によるドイツ語発音の変化

林　良子，北村 美里

近年英語教育で多く取り入れられつつあるシャドーイングは，モデル音声と同時に発音練習をしていく方法である。本研究ではシャドーイングの中でも「パラレルリーディング」と呼ばれる，テキストを見ながらモデル音声と同時に発音練習をしていく方法を日本人ドイツ語学習者に行なってもらい，練習前後の音読の発音の変化が見られるかどうか，また，モデル音声を聞いてから後に続いて練習するリピーティング練習と違いが見られるかどうかについて，音響分析および学習者を対象としたアンケートを行ない考察した。日本人英語学習者による先行研究においては，シャドーイングにより，話速が上がり，発話のピッチレンジが広がることなどが示されている。一方，発表者らが行なった外国人日本語学習者による先行研究では，リピーティング，シャドーイングどちらの方法でも話速は上がるが，語アクセント，文末イントネーションなどの韻律的特徴がシャドーイング群で大きく変化することが分かっている。本研究では，これまでに不明であった日本人ドイツ語学習者へのシャドーイングの効果を音声の変化という点から分析を行ない，今後の基礎的な資料を示すものである。

分析の結果，①シャドーイングによる発音練習は，話速，イントネーションなど韻律的特徴をモデル音声により近付ける効果があること，②学習者の内省によれば，約 5 回目のシャドーイング練習後に発音の変化を感じるとされたことから持続した訓練が必要であること，③しかし，アンケートの結果からは，シャドーイング練習に関する評価の好悪が分かれており，導入に工夫が必要であることなどが示唆された。

ブース発表（11:30～13:00）　　G 会場：102 講義室

留学を推進する麗澤大学の実証研究

山川 和彦，草本　晶，ホルガー・シュッテレ

麗澤大学では，ドイツ語専攻の学生の留学に加え，第二外国語でドイツ語を選択する学生のドイツ留学を支援している。その一つが 2008 年から始めた「英独プログラム」で，提携大学において，半年または一年間, 英語とドイツ語を並行して週 5～6 コマずつ学習するものである。このプログラムの言語教育政策的な意義は，英語をコミュニケーションツールと見なし，非英語圏であるドイツでの英語教育を容認すること，そして生活言語であるドイツ語の学習時間も確保するという複言語主義に立った視点を取り入れていることにある。

この制度を推進するために，1）学内試験による留学の効果測定，2）留学に備えた授業形態の改革，3）奨学金の確保を行っている。まず，効果測定では，留学前後に英語およびドイツ語の試験を課し，特に非英語圏で学ぶ英語力の伸長を測定している。英語力の伸長を証明することが，ドイツでの多言語学習の裏付けとなり，このプログラムの継続を保証するものである。さらに第二外国語学習者にドイツ留学を身近な選択肢として認識してもらうために，日本人とドイツ人のティーム・ティーチングの実施や，授業時間外でドイツ語発話練習を促進するプロジェクトを試験的に導入した。

今回のブース発表では，試みのいくつかを紹介しながら，第二外国語教育の活性化を図るための具体策を検討していくこととしたい。

シンポジウム III（14:15～17:35）　　A 会場：大講義室 A

「ドイツ語教育部会は誰（のため）のものか？（承前）
― 研究と教育の統合をめざして」（ドイツ語教育部会企画）
Wozu und für wen gibt es eigentlich den JDV? – Auf der Suche nach einem neuen Verhältnis zwischen Lehre und Forschung

司会：三瓶 愼一，保阪 良子

日本におけるドイツ語教育をめぐる状況は大きく変容しつつある。ドイツ人自身がドイツ語使用を放棄して英語に乗り換える傾向はすでにビジネス界や自然科学分野で顕著であり，人文・社会科学において

も進行しつつある。もはや日本の大学でドイツ語を学習しても，その成果を就職活動に活かせる可能性は少ない。ドイツ語教員をめざす後進たちが未曾有の就職難にあり，ドイツ文学・語学研究職のポストが減少の一途をたどる中，今後どのようなドイツ語教育が必要なのかが改めて問われている。こうした状況の中で，ドイツ語教育部会やその機関誌『ドイツ語教育』においては，会員のニーズに十分に応える情報が提供され，ドイツ語教育にかかわる広い議論がなされているであろうか？

教育部会自身の活動のありかたをめぐるこうした反省的議論の必要性を感じたドイツ語教育部会幹事会では，自らの改革に向けて，2010年の千葉大学における秋季研究発表会で，まずは広く会員の意見を聞く機会を持つこととした。そこで聞こえてきた声は，想像していた以上に厳しいものばかりであった。端的に言えば，教育部会は今やドイツ語教育学（教授法）の研究者がほぼ独占的に活躍する場になっており，ドイツ文学やドイツ語学などの研究者が事実上排除されている，との印象を多くの部会員が持つに至っていたのである。こうしたサイレント・マジョリティの批判や不満の声に，教育部会は気づくことすらできなくなっていたようである。

これまで献身的にドイツ語教育部会を支えてきた多くの幹事会メンバーにとっては，ドイツ語教育学（DaF）を学術（Wissenschaft）の一分野として確立することが重要な課題の一つであり，そのために,『ドイツ語教育部会会報』（1970 年～1995 年）を引き継いだ機関誌『ドイツ語教育』を学術誌として整備することに心血が注がれてきた。しかしその代償として，ドイツ語教育部会においてドイツ語教育学を専門研究分野としないドイツ語教員たちの発言が急速に減り，広い読者からの関心は薄れ, 議論の多様性が失われていったことは否定できない。次第にドイツ語教育学の専門研究の場と化していった教育部会から発信される論文や情報の多くは，同じ会費を負担しているドイツ文学やドイツ語学などを研究するドイツ語教員にとって，残念ながら関心をひくものでも役に立つものでもなく，これらの会員にとっての教育部会は，自分にあまりかかわりのない疎遠な組織となってしまっているようである。

こうした現状確認の上に立って，本シンポジウムでは，再びドイツ語教育に携わる者すべてが，その専門研究領域にかかわらず一堂に会してドイツ語教育について活発に議論できるような場としてドイツ語教育部会を再生させるための具体的改革の方策を議論したい。まずこれまでの経緯と問題提起として，いくつかの具体的改革案を提示した

後，ドイツ文学・語学・教育学の３研究分野，及び『ドイツ語教育』の編集長という，それぞれの立場からの提言を行い，ドイツ語教育部会の今後あるべき姿を求めて開かれた議論を行いたい。

1. これまでの経緯と問題提起

相澤 啓一

これまでの経緯を振り返った上で，教育部会の改革に向けて以下のような具体案を提示し，議論の叩き台としたい。

１）ドイツ語教育部会を Forschung（研究）中心ではなく，その名の通り Lehre（教育）の組織とし，部会員全員がその研究分野にかかわらず積極的に関与できるよう，組織や企画を改革する。

２）ドイツ語教育「研究」のための組織は別途設ける。組織改革で研究水準が低下しないよう，必要に応じ教育部会からの何らかの支援措置も考える。

３）機関誌『ドイツ語教育』はドイツ語教育のフォーラムとし，教育現場への直接の関わりが乏しい研究論文は掲載しない。研究論文は日本独文学会の『ドイツ文学』に掲載するものとする。

４）文学・語学を研究するドイツ語教員が積極的にドイツ語教育に関する議論に貢献するための具体的方策や企画を考える。これらの分野の「研究」と大学レベルでのドイツ語「教育」との有機的な結びつきに関するテーマを，シンポジウムや『ドイツ語教育』でも積極的に取り上げる。

５）ドイツ語教育研究者の研究成果が，文学・語学を研究するドイツ語教員にも共有され，ドイツ語教育現場において有効に活用されるための方策を検討する。

６）幹事選出の方法や会則変更などの必要な組織改革を行なう。

７）ドイツ語教育部会のドイツ語名称を適切なものに改め，会則のドイツ語版も作成して，ドイツ語による教育部会活動の発信能力を高める。

2. ドイツ語教育研究の立場からの提言

境　一三

１）日本のドイツ語教育発展のためには，ドイツ語教育研究の進展は不可欠である。その研究成果はすべてのドイツ語教員に公開され，共有され，現場で活かされる必要がある。また，現場の知見とそ

こで得られるデータは研究へと還元され，それらを対象としたさらなる研究の進展が望まれる。教育実践と研究活動は不可分一体のものとして機能しなければならない。

２）上記の目的を達成するためにも，ドイツ語教育部会はドイツ語教育研究者を排除すべきではなく，またドイツ語教育研究者は，自らを含むドイツ語教育実践者と生産的な協働関係を築かなくてはならない。

３)『ドイツ語教育』は,現在でもさまざまなカテゴリーを設けており，ドイツ語教育研究者以外の投稿を排除してはいない。しかし，専門研究者による論文以外は掲載されないという誤解や，掲載論文はドイツ文学，文化，語学などを専門とするドイツ語教員には興味が持てず，無用なものであるとの受け止め方があることも明白となった。今後『ドイツ語教育』は，ドイツ語教育研究者以外の教員も関心を持ちうるような編集方法を取るべきである。なお，本誌はドイツ語教育研究の分野で評価を確立しつつある。確かに『ドイツ文学』にもドイツ語教育のカテゴリーがあり，投稿の機会は与えられているが，教育関係の論考は『ドイツ文学』よりも『ドイツ語教育』に投稿するのが適当であると判断する会員もいることを付言したい。

3. ドイツ語言語学研究の立場からの提言

清野 智昭

本発表は，教育部会の活動がどうあるべきかについて，言語研究を専門にしている人間からいくつかの提言をし，その上で，いくつか具体例を報告するものである。提言の内容をまとめると以下の４つになる。

１）教育部会は狭義のドイツ語教育法研究者のみを対象とするのではなく，文学研究者や語学研究者を含めたドイツ語教育に関わる者すべてに開かれているべきである。

２)『ドイツ語教育』は，教育部会の全会員が投稿できる会誌になるべきである。ドイツ語教育研究者の狭義の研究成果は独文学会の機関誌『Neue Beiträge zur Germanistik』に投稿してもらうことにして，本誌には，研究成果を DaF を専門としない会員にも分かりやすく授業の「即戦力」になるような情報を発信していただきたい。

３）文学研究者，語学研究者も，自分の専門領域の研究成果から得られた知見がドイツ語教育にどのように役立つかを発信すべきであ

る。

４）語学研究からは，ドイツ語の教育に実践できる知見を多く提供できる。これを言語学を専門にしないドイツ語教員にも分かりやすく提供する場を『ドイツ語教育』の中に設けるべきである。

このうち，４）について，ドイツ語の音声や文法現象のうち，学習者が，教師からの明示的教授により理解が促進されると思われる現象を挙げ，その具体的な提示法を議論する。特に，語順に関する諸現象とモダリティ要素を取り上げる。

4. ドイツ文学研究の立場からの提言

宮谷 尚実

本発表では，ドイツ文学を専門とする発表者のドイツ語教育における実践報告を中心として，これからのドイツ語教育部会への建設的提言を試みる。ドイツ語教育において，教授法の知識が基礎的な素養として求められるのは当然のこととしても，ドイツ語教育学の研究者でなければ効果的な授業や教育ができない，という誤解があればそれを解こうとすることも本発表の目的である。

１）発表者の教育現場での実践と成果

２）発表者のドイツ文学研究とドイツ語教育実践との関連

３）ドイツ語教育部会に期待すること

以上 3 点につき報告する。ドイツ語音声学を専門とするわけでもなく，音声面でのドイツ語教育学の研究者でもない発表者がいくつかのプロジェクトによってドイツ語教育に多少なりとも貢献し続けることができるのは，そのドイツ文学研究，特に文献学的手法が教育現場に生かされているためだと考える。

たしかに，教育学の実証的研究をふまえた成果ではない，という限界はあるだろうし，そこにも目配りをしていくことが今後の課題となるだろう。だが，文学研究というフィールドを持っており，授業回数の点などでいよいよ余裕のなくなる大学の状況において，発表者が教育学研究にまで専門を広げることは極めて難しい。ドイツ語教育部会，あるいはその機関誌である『ドイツ語教育』に，ドイツ語教育学研究と，それ以外を専門とする部会員との架け橋となるような役割を期待したい。

5. 機関誌『ドイツ語教育』の果たすべき役割

高橋 秀彰

ドイツ語教育部会が発足したのは 1970 年で，翌年に機関誌『ドイツ語教育部会報』が刊行された。当初は言語学を専攻する会員が多かったことを反映し，言語学関連の論文，言語研究への思いなどを綴った論考が中心で，内容は多岐にわたっていた。『会報』は 49 号（1995）から『ドイツ語教育』と改称して発刊されている。現在では，ドイツ語教育に関する投稿に限定され，ドイツ語教育を対象とする研究分野が「ドイツ語教育学」として認知されるに至った。

機関誌の専門性が高まるにつれてドイツ語教育の専門誌としての色彩が濃くなり，部会員の多数派を占める文学や言語学を専攻する会員が投稿しにくくなったとの指摘もある。これは専門性が高まることによる必然的な帰結かもしれないが，文学や言語学の専攻者が離反すれば，機関誌の存続が危ぶまれることにもなりかねない。教育部会は，ドイツ語教育の研究者だけでなく，ドイツ語教育の実践者のための組織でもあるはずだ。したがって，機関誌はドイツ語教育を実践するすべての会員のものであることを再認識し，しかるべき改革が求められるだろう。

改革案として,『ドイツ文学』と『ドイツ語教育』の位置づけ，原稿のカテゴリーと審査基準の再検討などが課題となろう。改革に当たっては，東アジアの言語の台頭，グローバル化による英語の重視，ドイツ語授業数の減少，多様な学会の発足による発表機会の分散など，多様な条件を考えるべきだ。

シンポジウム IV（14:15～17:35）　B 会場：AV 講義室

ロマン派の時代の危機意識とユートピア
Das Krisenbewusstsein und Utopievorstellungen im Zeitalter der Romantik

司会：桑原　聡

ロマン派とそのユートピア思想については今まで様々に論じられてきた。ロマン派の意義はそれが「近代」と関わるが故に，それぞれの時代において問われてきたし，また，問われねばならない。21 世紀に入り，私たちの社会的・文化的基盤は大きく変化し，また今も変化し

つつある。現代においてロマン派が私たちに何を意味し得るかを問い直すことが本シンポジウムの趣旨である。本シンポジウムは，従来の研究に対して，新しい方法を採用する点において異なる。すなわち，文化史的アプローチである。

文化史的アプローチを採用することの特色は先ず，第一に，「近代」を軸に文学研究だけでは視野に入ってこない対象を「文化」の名のもとに包摂することを可能にする。本シンポジウムに沿って言えば，神学・神秘学思想，自然科学，歴史・政治意識，言語論，庭園造形といった文化の様々な諸相を同一の問題意識から扱うことができる。

第二に，文化史的に定位することは，「ロマン派の危機意識」を分野横断的に検討することを可能としてくれると同時に，現実に対する批判の根拠を西洋文化史のなかに探る可能性を与えてくれる。

このシンポジウムで取り上げられるのはレッシングのヘルメス主義，J. W. リッターの自然哲学，アイヒェンドルフの歴史・政治意識，ブレンターノの言語論，ノヴァーリスと P. シェアバルトの幻想的庭園描写における光と色彩のもつユートピア指向である。

各発表は多様な対象を扱うにもかかわらず，現実が歩んだのとは別の「あり得たかもしれない可能性」を示すことになる。同時にロマン派的志向が，いわゆる「ロマン派」という狭義の文学史的時代区分には収まらないこと，今回はレッシングのみを取り上げるが，当然，シラー，ゲーテもヘルメス主義を介して時代の危機意識を共有していること，また，ロマン派の時代以後 20 世紀においても，例えばシェアバルトがノヴァーリスの後継者の一人であることを提示しようとする。

本シンポジウムにおいて「時代の危機意識」については発表者の間に意見の違いは存しない。しかし，「ユートピア」像について発表者が必ずしも統一した見解をもっているわけではない。それは，一つには，対象となっているロマン派の人々がこの点において一致していたのではないからであり，もう一つには，ロマン派の時代からおよそ二世紀を閲した今，様々な困難を孕む今に生きる私たちがユートピアに対して懐疑的にならざるをえない経験を経てきているからでもある。しかしながら彼らが構想した，ないしは構想しようとしたユートピアーそれらが社会の全体に及ぶことを本シンポジウムは示唆することになるーと今一度真剣に向き合い，過去の「あり得たかもしれない可能性」を再考することは，混沌の現代にあって，必ずしも無益なことではないと私たちは考えるものである。

1. レッシングのヘン・カイ・パン

坂本 貴志

ハイネは『ドイツ古典主義哲学の本質』の中で，ロマン主義へと至るドイツの精神史の展開の中で最も重要な役割を果たした思想家として，ルターに次いでレッシングを挙げる。そのレッシングの思想的モットーは，ヤコービが暴露したように，Deus sive natura あるいは Hen kai Pan であって，これはスピノザの汎神論に由来する言葉であると同時に，新プラトン主義あるいはヘルメス主義の思想の核心を言い表す言葉である。レッシングにはまた,『啓示による人類の教育』と題する歴史哲学の論考があり，ここにはフィオレのヨアキムに由来する異端的な千年王国の夢を，ヘルメス主義の歴史哲学によって支えようとする企図が読み取れる。レッシングを神秘主義との関連から捉える先行研究には Wolfgang Gericke のものがあるが（Lessings theologische Gesamtauffassung,1985; Theologie und Kirche im Zeitalter der Aufklärung, 1989），本発表は Gericke 以降大幅な進歩を遂げた，ルネサンス・バロックの思想文化研究の成果を踏まえて，古代神学ならびに哲学との関連からレッシングの思想を位置づけようとする。

2. ヨーハン・ヴィルヘルム・リッターのダウジング研究

佐藤 朋之

「電気化学の始祖」ヨーハン・ヴィルヘルム・リッターは，1805 年バイエルン王立学術アカデミーの物理学部門に正教授として招聘されたが，直後より，ロッドや振り子等を用いて地下の水脈や金属の存在を感知するだけでなく，人の運命さえ予知できるというダウジングの謎に挑む。疑問視されながらも永く命脈を保ってきた棒占いのメカニズムを，最新のガルヴァニズム研究の知見をもって解明できると考えたリッターに対し，アカデミー内外で厳しい批判が噴出，やがて彼の研究は「科学」の領域から完全に排除される。

1800 年当時，時代の趨勢に敏感な文学者哲学者は，競って自然科学の先端的な成果を吸収し,そこに創造的なヒントを見出そうとしたが,同時に，合理精神に貫ぬかれた全く新しい世界把握の手立てには疑念を覚えてもいた。それは，自らの社会的・学問的な礎を築くことを急務とする科学者たちの自己規定に関わる問題でもあった。

本発表では，数量的・経験主義的な真理探究の方法が制度的に整備されるなか，数値化に馴染まない「個(別)性」や「(精)神性」をなお

も内包し続けるロマン主義的「自然」が，科学実験室から放逐されていく経緯を，リッターのダウジング研究の顛末を通して明らかにしていきたい。そこからは，学問体系の根本的再編の時にあって，「全知」のユートピアを求めて果たせぬ，新旧自然研究者それぞれの危機感をも看取することができるだろう。

3. ドイツ国民記念碑とアイヒェンドルフ

松原 良輔

アイヒェンドルフは『マリーエンブルクのドイツ騎士修道会居城の再建について』において，ゴシック期の城郭建築を代表するこの名城がたどった歴史を概観すると共に，18 世紀末には荒廃しきっていた城が，対ナポレオン解放戦争以降，ケルン大聖堂と比肩しうるドイツの国民記念碑として再建されるまでの過程を総括した。再建事業を主導した西プロイセン州長官テオドール・フォン・シェーンの依頼を受けて執筆されたこのテクストは，国民統合の象徴を自国の歴史遺産に求めようとする「ロマン主義的ナショナリズム」の系譜のなかに位置づけられるが，同時にその枠には収まりきれない多義性を帯びている。本発表では，中世キリスト教世界が生み出した建築物を「近代の国民が共有すべき歴史=物語」に組み込むうえでドイツ・ロマン主義の言説がいかなる役割を果たしたのか，このテクストを例に検証する。同時に，庭園や祝祭といった重要なモティーフの分析を通じて，アイヒェンドルフのマリーエンブルク論が，近代プロイセン国家の志向する記念碑のあり方を超えたある種のユートピア像を提示していることを論証し，それが近代の世俗化過程が引き起こした，「聖なるもの」をめぐる緊張関係に対するアイヒェンドルフの危機意識に支えられていたことを明らかにしたい。

4. クレメンス・ブレンターノにおける「子どもの言語」の理念と詩論

岡本 和子

19 世紀初頭のドイツ文学には，「楽園の喪失」という共通の時代認識が見られる。クレメンス・ブレンターノもそうした認識を持っていた作家の一人であるが，彼は楽園の喪失を，具体的には幼年時代の喪失として捉えていた。このときの子どもは，楽園的形象というよりもむしろ，楽園の喪失を言語的に表現する形象である。ブレンターノに

おける子どもは，完成された言語を持たない，言語を学びつつある存在として，楽園喪失後の新たな言語の担い手となっているのだ。そうした子どもの言語は，縮小・反復・否定といった，楽園の喪失を如実に反映した原理に基づいており，この「子どもの言語」という理念は，楽園喪失の時代における言語表現の可能性を示すものとして，ブレンターノの詩論の基盤にもなっている。ブレンターノにおいては，子どもの言語も芸術作品も，楽園喪失の決定的な証言なのだ。芸術作品は，楽園を否定したうえで構築される「代用楽園」として，いわば留保つきのユートピアの役割を担っている。

本発表では，ブレンターノのゴッケル・メールヒェンの初版（1815-17）と改作版（1837）の比較を通して，以上のことを論証する。彼が自作のメールヒェンを改作したのは，カトリックに帰依し，世俗的な芸術に対して懐疑的になり，詩的創作活動から遠ざかっていたときだった。しかし改作版ではかえって，危機の時代における芸術作品の可能性について，考察が深められている。

5. ロマン派の時代の人工庭園描写とパウル・シェアバルトの庭園描写

桑原　聡

18 世紀初頭にイギリスで，それまでのバロック庭園に抗して庭園革命が生じる。言わずとしれたイギリス風景式庭園の成立である。18 世紀後半からドイツ各地でイギリス風景式庭園が造られることになる。古典主義，ロマン主義を問わず風景式庭園は熱狂的に受け入れられる。しかしながらこの時期のドイツ文学を見ると，文学作品に風景式庭園が描かれることは皆無ではないが，おおかた否定的であり，ロマン派の人々は「幻想的人工庭園」をその作品に造形することを好んだ。そのことの意味を問うことが本発表の趣旨である。

一般にロマン派における人工庭園描写は芸術の象徴であり，そしてそれはゲオルゲの「アルガバル」に極まると主張される。（Friedmar Apel 等。）しかしながら，ロマン派の庭園描写を丹念に読み解くならば，それらがむしろユートピアを指し示していることに気づかされる。そしてその流れは 19 世紀後半から 20 世紀にかけて Paul Scheerbart の人工ガラス庭園に受け継がれている。本発表では，ノヴァーリス『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』第 7 章クリングゾール・メールヒェンに描かれる三つの庭園のうちの二つと，P. シェアバルトの「フローラ・モール」に描かれるガラス花の庭園を主たる対象として分析

を行うことによって,「幻想的人工庭園」造形が彼らのユートピア志向の形象化に他ならないことを示唆する。

シンポジウム V　（14:15～17:35）　　C 会場：レクチャーホール

翻訳という問題から見えてくる言語，文化，人間
Sprache, Kultur und Menschen －Probleme bei der Übersetzung

司会：竹内 義晴

日本語とドイツ語はそれぞれに独立した言語である。音，語彙，文法，社会文化的背景まで，すべて違っている。他方，それぞれの言語を使用して生活しているのは，その身体的・知的能力をベースに，それぞれの場所で社会，文化，歴史的関係を築きあげ，引き継いできた，人間である。この二つの言語を例にして考えると，片方の言語を母語として生まれたとしても，なにかの理由で生まれてすぐにその言語から切り離され，もう一方の言語を話す社会の環境にさらされるならば，そちらの言語の母語話者と同等の言語能力や文化的背景をもつ人間に育つ。また，思春期を過ぎてからもう一方の言語を学んだという人間も，ある程度，または相当程度に，ドイツ語ということばを使いこなすようになる。日本のゲルマニストの多くは，後者の仕方でドイツ語を学び，ドイツ語と日本語の間で，様々な経験を積み，文学や言語，文化の研究に頭を突っ込みながら，しかし，根っこのところでは，言語の違いや文化の違いに頭を悩ませ続けてきた。

日独の翻訳という現象は，このような言語，そして，その背景をなす文化や人間について考察する上で，面白いきっかけを与えてくれる。近年の日本文学がドイツ語に翻訳されて出版されるという事実の蓄積の結果，私たち日本のゲルマニストのドイツ語へ関心の持ち方や関わり方は，ドイツ語から日本語へという一方向だけではなく，日本語からドイツ語へという逆の方向においても，比較的容易になってきた。

二つの異なる言語では，ぴったりと重なる翻訳関係が成り立つ表現が見つかるのはまれである。同等と思われることがら・事象が，二つの言語では，まるっきり異なる仕方・とらえ方で表現されることがある。また，込み入ったことがらでも，翻訳が比較的やさしいことがらがあるかと思えば，簡単なことがらにもかかわらず，翻訳しようとすると，とても苦労することがあったりする。

私たちは，日本文学の原典とそのドイツ語訳を比較しながら，日本語からドイツ語への翻訳ということを考える，またはその逆方向のこ

とを考える。そしてさらにその作業を通じて，日本語とドイツ語という言語について，いわゆる言語面での違い，言語を使う人間の思考方法やメンタリティーの違い，社会・文化の違いについて考察を加えたい。さらには,「日本語」･「ドイツ語」,「～語」と簡単に言ってすませている，ことばとはそもそも何なのか，ことばの背景をなす文化や人間のもののとらえ方＝認知や行動様式とことばはどんな関係にあるのか，それをどう説明するのか，などの問題を考えてみたい。

翻訳というテーマを中心に,「語彙」,「語り手の視点」,「聞き手・読み手の視点」,「省略」の問題についての言語研究者からの議論,「翻訳の楽しみ」についての文学研究者からの議論を有機的に関連させて全体の議論を組み立てていきたい。

1. 翻訳と語彙 ―「うらみ」がドイツ語に翻訳できない

竹内 義晴

ある言語の表現について，違う言語では重なり合いが相当に食い違う表現しか見つけられないということがよくある。そのような場合，それぞれの言語文化のもののとらえ方＝認知や行動様式の違いが強く反映しているに違いない。

日本文学のドイツ語訳における「うらみ」という表現の具体的な翻訳例についての考察に基づいて,「うらみ」という表現について，その認知的，社会文化的背景を含めた記述を提案する。そして，ドイツ語には，この全体の記述に対応する表現がないため，翻訳が非常に困難であり，部分的に意味の重なる»hassen«や»böse sein«，»Groll hegen«などの表現を強引に対応させることでしのいでいること，その結果，翻訳された表現には日本語表現の対応として問題が多いことを指摘する。

このような問題が日本文化の「甘え」や「未練」という現象と関連していることは先行研究でも指摘されているが，本発表では，社会文化を見据えた認知的な言語論としての考察を進める。日本の文化においては，被害者は加害者に対して怒り，憎み，そしてそれを内面に秘めるだけではなく，加害者が被害者の苦しみや悲しみの気持ちを理解するべきだということが,社会全体の基調として強く求められていて，それはさらに深く日本の文化に根差している。そして，そのような全体が言語表現の差として表れているのだという議論を展開する。

2. 翻訳と語り手の視点 ― 三人称物語における情景描写を例に

成田　節

ドイツ語と日本語の物語を原文と翻訳で読み比べると，情景描写における視点の違いが感じられることが多々ある。すなわち，語り手自身が直接その場面に居合わせて，あるいは場面に居合わせる登場人物の目を通して情景･状況を知覚しているように描くか(日本語の場合)，登場人物が情景・状況を知覚しているということを語り手が外側から客体化して描くか（ドイツ語の場合）という違いである。これは，語り手がどこに身を置いて出来事を描いているかに関する違いであると言える。

本報告では，三人称の物語（原文とその翻訳）から採った事例における情景描写を観察し，語り手がどこに身を置いて情景を描いているかという（直感的ではあるが多くの読み手が共有できるであろう）イメージの違いを確認する。そしてこの違いは，主として(a) 登場人物の表示・非表示と，(b) 動詞の時制，すなわち過去形の出現・非出現によって生じるものであるということを示す。同時に，過去形の意味機能の違い及び人称システムの違いという観点から，日独語の文法構造に語り手の認知のありかたがそれぞれどのように反映されているかについて考察する。

また，このような考察を通じて，原作と翻訳を比べるという方法が日独語の対照研究にとってどのような点で有効であり，どのような問題点があり，どこに限界があるのかについて議論するきっかけも与えたい。

3. 翻訳と聞き手・読み手の視点
― 共同注意を軸とした日独語対照研究

大薗 正彦

ある事態を言語化する際，話し手は，対象となる事態をどこから眺め，そのどの部分を取り上げ，そしてそれをどのように言語化するのかという一連の決定を主体的に行う。この関連で日本語を特徴づけている重要な点は，日本語では，ドイツ語と比べ，事態を「自己中心的」な視座から捉え,「見え」のままに言語化する傾向が強いということであろう。

そうであるとすると，聞き手を含めたコミュニケーションの場でそのような言語がうまく機能するためには，それを補うような仕組みが

働いているはずである。Hinds の指摘した「聞き手責任」はその一つであろう。ただし実際には，話し手側でも，自らの「見え」を聞き手に共有させようとする様々な言語手段を用いているように思われる。

本発表では,「共同注意」と呼ばれる発達心理学の概念を援用しながら，日独語に見られる特徴的な相違を考察する。対象に他者と一緒に注意を向け，それを共有しようとする「共同注意」は，人に共通に見られる行動であり，関連した言語現象も日独語の双方で見出される。その上でなお，日独語間において有意な差が認められるというのが本発表での主張である。

具体的には，日本語らしいとされる一連の表現，例えば，無助詞（コレ，オ土産デス),「ノダ」（金沢ニ行ッタノデスカ),「ネ」や「ヨ」（コノオ菓子，オイシイデスネ／ヨ）などの使用を，ドイツ語の対応表現と対照しながら考察していく。

4. 翻訳と省略
― 日本語はドイツ語に比べて「省略」が多いか

宮下 博幸

従来の翻訳の対照研究では，日本語では主観的な事態把握が好まれ，英語・ドイツ語では客観的な事態把握が好まれることが指摘されてきた。また日本語のような言語には「省略」の傾向が見られ，英語（ドイツ語）のような言語では「省略」が現れにくいとされてきた。しかし両言語の翻訳を対照する際に，これとは異なる傾向が見えてくることがある。それは次の例に見て取ることができる。

a. ぼくが「なんで？」ってきいたら，「えんがおやすみになったから。」って。『ゆきがやんだら』
b. >Warum denn?<, fragte ich. >Der Kindergarten hat heute zu.<
„Es schneit!”

ここで日本語では伝聞を表す形式「って」が用いられているのに対し，ドイツ語では対応する形式が「省略」されている。この場合に「って」を「省略」すると，日本語の会話スタイルとしては極めて不自然に響く。ここで判明するのは，日本語では情報の出所がよそにあることを表す表現が必要なのに対し，ドイツ語ではそれが必ずしも必須でないことである。このような伝聞表現は近年言語類型論的な研究において「証拠性」というカテゴリーとの関連で議論されている。この概念を

用いるなら，日本語とドイツ語では証拠性の明示の度合いが違うということになる。本発表では主に絵本のテクストに依拠しつつ，日本語とドイツ語における証拠性の表示の相違を，代表的な証拠性のシステムに照らしあわせることで明らかにする。

5. 翻訳を読む楽しみ
― ドイツ語経由で日本文学を享受する

宮内 伸子

おおかたの日本人ゲルマニストの母語である日本語で書かれた文学作品を，そのドイツ語訳と対照させることで，日独両言語の発想や好まれる表現のちがいを確認する。そうすることで，よく知っているつもりの作品が新しい姿で立ち現れ，それまで気づかないでいた新たな面白みを発見することも可能である。

翻訳は二つの言語が出会う場という意味で，異文化コミュニケーションの伝統的なフロントの一つである。外国における日本文学への眼差しはもはやエキゾティシズムやオリエンタリズムの枠組みでは捉えきれなくなってきているが，現代作家の作品でもそこはかとない異文化感が，海外の読者にとっての魅力の一要素であることは確かだろう。そこには日本語で書く限りついて回る日本語的発想が関連していると考えられる。

そのような日本語的発想を，日本語の文学作品をそのドイツ語訳と丹念につき合わせていくことにより，実証的に浮かびあがらせたい。翻訳で生じる意味のずれを確認していくことは，日本語において好まれる言い方，ひいては日本語話者に特徴的な認知スタンスを探る有効なデータの宝庫となるだろう。本発表では，吉本ばなな，川端康成，三島由紀夫，太宰治などの作品を原作とドイツ語訳とをつき合わせつつ読み直した結果を紹介する。

日独語対照の語学的取り組みによる成果を文学作品を享受するために応用し，またさらなる事例を提示して日独語対照のデータを豊かにしていきたい。

口頭発表：文学 2／文化・社会 2（14:15～17:05）

D 会場：101 講義室

司会：原　亮，Johannes Balve

1. 《影のない女》　― 文学と音楽のはざ間で ―

野口 方子

フーゴー・フォン・ホフマンスタールの《影のない女》には，リヒャルト・シュトラウスとの共同作業であるオペラ版と，物語版の二つの形態がある。これまで物語版は，オペラ版に不満を持つホフマンスタールの代償行為と見なされることが多く，物語とオペラとは「別物」という扱いをされる傾向にあった。

しかし，ヘルマン・ブロッホも言うように，ヴィーンに生まれ育ったホフマンスタールにとって詩作と音楽とは不可分なものであり，従って物語版とオペラ版とは「別物」なのではなく，互いに補完し合うものと見たほうが作品の本質に近づける。その際，ホフマンスタールがオペラでは何をどれだけ音楽に託したか，ということを考慮する必要があるが，シュトラウスもまた一番重要な場面で音楽を止め，言葉で語らせている。ここに二人の共同作業の真骨頂を見ることができよう。

そして物語版は，オペラにも比肩しうる言語芸術作品として志向されたものである。ブロッホはホフマンスタールのことを「語による作曲者」と言い，川村二郎は「理念の象徴としての音楽」をホフマンスタールは求めたのだと言う。また高橋英夫は，《チャンドス卿の手紙》では「瞬間にして持続という二重性」が表明されていると指摘しているが，まさにこの「瞬間に宿る永遠」の成就のために音楽が必要だったのであり，また「地上の存在」をシンボリックに「結び合わせる永遠の秘儀」を描出するためには物語という形態が必要だったのだ。《影のない女》は，オペラと物語との二つが揃って初めてその作品世界が成就するのである。

2. Figuren der Umwertung bei Friedrich Nietzsche und Jean Genet

Leopold Federmair

Jean Genet hat Nietzsche mit großem Interesse gelesen, allerdings erst, nachdem er den Hauptteil seines eigenen literarischen Werks verfaßt hatte. Es ist anzunehmen, daß die Romane Genets nicht durch Nietzsche

beeinflußt wurden. In meinem Vortrag versuche ich, konkrete Beispiele der Umwertung in einer Reihe von Schriften Nietzsches und Genets vorzustellen und zu systematisieren.
Bei Nietzsche zeigt sich, daß er Wertesysteme in der Regel in historischer Perspektive sieht und auf der Grundlage seiner Befunde eine neue Ethik zu skizzieren versucht. Die häufig wiederkehrende Denkbewegung ist ein Dreischritt: 1. Alte Werte in der Antike und in der Prähistorie, 2. Christentum und gegenwärtige Dekadenz, 3. Erneuerung. Nietzsche schwankt in seinen Entwürfen zwischen Ideen, die eine gesellschaftliche Gruppe, etwa ein „Volk“, betreffen, und einem Elitismus, der jeweils nur Einzelpersonen – die „Starken“ – begünstigen soll.
Genets Romane fiktionalisieren reale Erfahrungen, die er persönlich am Rand der Gesellschaft gemacht hat. Fiktionalisieren heißt dabei, Realitätsfragmente in eine Phantasiewelt umzugestalten, in welcher ästhetische Kriterien vor moralischen überwiegen. Auch bei Genet ist ein Schwanken festzustellen: Auf der einen Seite das Milieu der Häftlinge, der Eingeschlossenen, die die Hierarchien und Wertordnungen der Mehrheitsgesellschaft aufnehmen und sogar überbieten. Auf der anderen Seite das Milieu am Rand der Gesellschaft (Bettler, Gauner, Schwule), wo eine spielerische Freiheit vorherrscht.

3. ボードマーとフュスリ ― スイスの疾風怒濤

今村　武

チューリヒでボードマーの薫陶を受けたフュスリは，後にイギリスに渡り，画家として活躍する。彼の生涯は，シュトゥルム・ウント・ドラング詩人の一つの典型的な生涯パターンを提示する。時代に先行する啓蒙の受容，社会との軋轢，出奔，活動の継続である。画家フュスリの活躍は，美術史においてはロマン主義の先駆として理解されている。

スイスにおける疾風怒濤の先行を可能としたのは，すでに 1750 年代に始まる都市国家の商業的な発展，これに付随する政治の「資本主義化」，チューリヒ市政の「腐敗」に対しボードマーが詩的，歴史的な理想像を基に政治的なそれを構想したこと，彼の政治的理想を教育目標に解釈し，有為な若者を教育したことが挙げられる。その弟子フュスリらによるグレーベル弾劾事件は，一つの成果と言ってよい。

スイスの疾風怒濤については社会・経済史的観点からの研究が開始

され，本発表もそれを参照しつつ，フュスリとラヴァーターによる不正なラントフォークトの弾劾は，突発的なものではなく，また若い詩人の正義漢気取りなどではない。汎ヨーロッパ的文化移入を行ったボードマーの詩論的理想像の政治的解釈とその実践プログラム上にあり，その後のフュスリのイギリス移住も文化交流活発化の一環であった，との見方を示す。さらにフュスリの絵画論も，シュトゥルム・ウント・ドラングの継続として解釈する余地を見出すことができる。

4. ベンヤミンのクラーゲス読解におけるイメージ論の転位 —「風景」への眼差しをめぐって

宇和川　雄

新しい技術メディアのなかで人間の知覚が変容していく近代の過程には，ダゲレオタイプや銀幕をすすんで受け入れる立場とともに，それに逆行するようなもうひとつの立場も存在した。彼らは近代文明で失われた経験の次元を求め，もはや夢やエクスターゼにわずかに痕跡がみとめられるにすぎない豊穣なイメージの経験を，太古の世界に渇望した。一方は技術メディアがもたらす映像経験に向かい，他方はあたかもそれに対抗するように，人間のイメージ能力のアルカイックな本性に向かう。この二つの言説がドイツで並行して展開され，そして同時期に頂点を迎えたというのは，興味深い事実である。

本発表はその二つの言説の秘密の関係を，L・クラーゲスと W・ベンヤミンのひそかな対決のうちに見出したい。クラーゲスは 1922 年に先史時代の人間の意識状態を「イメージの現実」の信仰に還元する『宇宙生成的エロス』を発表した。早くからクラーゲスの影響を受けていたベンヤミンは（Hansen 2008），後にこのイメージ論を大胆に要約する一篇の風景論を発表している。ベンヤミンはしかしある時点でクラーゲスから袂を分かつ。けれどもその訣別はクラーゲスの説く「イメージの現実」の単純な否定ではなく，それを新しい学へと転位することを意味していた。二人のあいだの屈折した模倣の関係をたどり，ベンヤミンがクラーゲスから引き出した「イメージ学」（Schöttker 2004）の可能性を明らかにすること，それが本発表の課題である。

口頭発表：文学 3（14:15～17:05）　　E 会場：103 講義室

司会：公地 宗弘，西村 千恵子

1. セルマ・ラーゲルレーヴ『モールバッカ』における「脚部障碍」の表象 ― 優生学思想への関心を背景に

中丸 禎子

本発表では，優生学思想への関心を背景に，スウェーデンの国民作家ラーゲルレーヴ（Selma Lagerlöf, 1858-1940）の自伝的小説『モールバッカ』（*Mårbacka*, 1920）における障碍者像を考察する。

1930 年代以降，ドイツと北欧は，片やナチズム，片や福祉国家という，一見対照的な道を歩んだ。しかし，その背景には，優生学思想という共通項があった。同思想は障碍者を対象とする断種法として国家事業化され，ドイツではホロコーストの嚆矢となる一方，北欧では福祉政策の柱として，1970 年代まで存続した。『モールバッカ』は，同思想隆盛下の両地域で,「ユダヤ人と共産主義者に毒される以前の健康で素朴なゲルマン的生」を描いた作品として人気を博していた。

本発表では,『モールバッカ』に描かれた障碍者像に着目する。作者自身の幼少期をモデルとする「セルマ」は，下半身が麻痺して寝たきりになるが，療養先で「楽園の鳥」を見るために,「立って歩いた」ことで，歩行能力を取り戻す。この場面を，まずは，障碍が克服される物語，すなわち障碍者排除の一形態として批判する。同時に，作者が「自分自身」を障碍者として描いたこと，しかも，その像が「楽園」という「異世界」と通じる能力を持つ者であることに着目し，ここに他者排除を超える可能性を見出す。

「脚部障碍」は,「山羊脚の悪魔」のイメージと結びついて，ヨーロッパ文明が根源的に持つ他者排除の構造を体現すると考えられる。ラーゲルレーヴ文学における障碍者像批判を，近代批判・文明批判へと発展させることを，今後の長期的な課題とする。

2. パウル・ツェラーン「死のフーガ」再読 ― あらたな読みを模索するための予備作業

黒田 晴之

若きツェラーンと「死のフーガ」については，Barbara Wiedemann-Wolf などを筆頭に研究の蓄積があり，これらを含む「死のフーガ」研究を総括した Theo Buck のモノグラフィーもある。だがそ

れらの研究に基づく言説が過度に反復されてきたため，この詩をめぐるその後の議論はかえって停滞している観がある。

Buck が依拠する Wiedemann の研究からは 20 年以上が経過し，冷戦後に隣接分野で明らかになった事実，さらにはそれらをめぐってなされた議論も相当数にのぼる。本発表はそうした事実と議論を紹介したうえで,「死のフーガ」で「ツェラーンが書いているのは，アウシュヴィッツについての詩ではなく，絶滅収容所で死んだ者たちへの記憶の詩的なフーガである」という Buck の主張を検討し,「死のフーガ」をあらたに読むための中間的提言をしたい。

具体的には，1. ツェラーンとその両親の近くにいた人物の日記その他，2. 当時の音楽事情，3. ホロコーストの表象をめぐる議論，4. この詩の受容史に基づいて,「死のフーガ」という詩のもつ射程を考察してみたい。

3. ウーヴェ・ヨーンゾン『記念の日々』*Jahrestage* における故郷について ― D.E.を例に ―

西尾 悠子

「故郷」はウーヴェ・ヨーンゾンの長編四部作『記念の日々』*Jahrestage* の底を流れるテーマである。故郷の問題をめぐっては，主人公ゲジーネの「失われた故郷と願わしい故郷の探求」を中心とした議論が Pokay（1982）や Mecklenburg（1986, 1997）らによってこれまで展開されてきたが，彼女と彼女の系譜に連なる人々以外の登場人物の故郷に関しては，踏み込んだ考察はほとんどなされていない。ゲジーネの恋人の D.E.もそのうちの一人である。

ナチス・ドイツ時代のメクレンブルクに生まれ育ち，1953 年 6 月 17 日の暴動を機に東ドイツを去り，互いに紆余曲折を経てアメリカにたどり着いたゲジーネと D.E.は，似通った背景を持っている。しかし己の過去や故郷との向き合い方，そして政治のあり方に対する姿勢が決定的に異なるため，D.E.は「過去と決別し，アメリカ社会に適応した男」「すべての点においてゲジーネと対照的な人物」と見なされることが多い。それらはあくまでゲジーネの与える主観的な情報からの帰結に過ぎず，D.E.がゲジーネに宛てた手紙（1968 年 3 月 3 日）や彼の昔語り（1968 年 5 月 11 日）から見えてくる人物像とは一致しない。そこから浮かび上がってくるのは，絶望の淵にいてもなお故郷を求める男の姿である。

本発表では D.E.の立ち居振る舞いや彼自身の語りを検証し，彼の故

郷との関係を明らかにすると同時に,『記念の日々』の示す多様な故郷の像について論じる。

4. アンナ・ゼーガース『死者はいつまでも若い』の話法研究

神田 和恵

アンナ・ゼーガースの戦後初の長編小説『死者はいつまでも若い』は，第二次世界大戦直前から戦争末期までのドイツをめぐる歴史的事実をできるかぎり作品世界に取り込みつつ，その中で生きる人間群像を，四つの世界に分けて並行的に描いている。各世界の中心人物は，地下活動家エルヴィン殺害の一事において，第 1 章の 1 で一度だけ出合う。エルヴィンは労働者で，殺害者のうちクレムはラインの産業資本家出身，リーヴェンはバルトの大地主出身，ナードラーは農民である。四つの世界は次世代に渡って展開される。

この作品の話法研究を中心に据えた論文に，1962 年ライプチヒ大学教育学科に提出されたゲルトラウト・ハルトマンの国家試験のための研究（アンナ・ゼーガース・アルヒーフ Nr.642）がある。ハルトマンは，直接話法が最も多いと指摘し，間接話法と体験話法の意義も認めている。体験話法は『第七の十字架』に比べ使用頻度が少ないとし，実例も挙げるが, 少ない理由や体験話法の機能には十分踏み込まない。発表者は，直接話法の頻出には，登場人物たちの議論に政治的事件を反映させることで社会主義リアリズムの面目を保とうとした，作者の工夫を見る。体験話法は登場人物の 12 人に渡って使用され，その人物たちの葛藤のピークを示し，内面描写に精細を与えている。直接話法による理屈っぽさや地の文による説明調が多い中，死者たちの生きた時間へのオマージュ性がにじむ作品に仕上げた功績は，体験話法によるところが大きいと言える。

口頭発表：語学 2／文化・社会 3（14:15～17:05）

F 会場：104 講義室

司会：阿部 美規，西嶋 義憲

1. 民族性を脱したトルコ系移民のドイツ語
― その認知過程における言語学者の役割をめぐって

田中 翔太

「トルコ系移民のドイツ語」に関する研究は，1970 年代に *Gastarbeiterdeutsch* という名称のもとに始められた。その後，トルコ系の作家 Zaimoglu（1995）がトルコ系移民の話すことばにスポットライトを当て，*Kanak Sprak*「カナーケのことば」という名称を与えて以降，このことばは Hip Hop の世界や TV メディアにおいて取り上げられた。しかし，*Kanak Sprak* はコメディアンたちによって様式化され，Zaimoglu（1995）が本来提示したものから逸脱していった。このような概念の一人歩きは，言語学者が与えた名称と定義に関しても確認できる。例えば言語学者 Wiese（2006）は，民族性を脱しつつある「トルコ系移民のドイツ語」に *Kiez-Sprache*「（特定）地区のことば」という名称を与えた。この名称がメディア（新聞，雑誌，インターネット記事など）に積極的に取り上げられ，一般のメディア受容者（読者）にも認知されるなかで，その概念について曖昧さ，多面化，誤解が生じることとなった。その際，Wiese（2006）がこの用語の定義に「生産性」という肯定的評価を与えて論を展開したことが，誤解や拡大解釈を誘発したひとつの大きな要因となっている。

本発表は，「トルコ系移民のドイツ語」が脱民族化していく過程を上記のように，言語学者の役割，メディアでの報道，読者の理解という 3 つの方向から再構成しようとするものである。

2. ドイツ在住トルコ系移民とドイツ人の言語使用 —「謝罪」に関する社会言語学的研究—

浜　由依

本研究は，トルコ系移民とドイツ人の言語使用に関する異同を検証することを目的とし，面接調査及び「謝罪」の発話行為について質問紙調査を実施した。調査対象は，フランクフルト，ケルン，マンハイムにある基幹学校のトルコ系移民の学生（以下，トルコ系移民）とドイツ人の学生（以下，ドイツ人）である。具体的には，質問紙に提示された謝罪に関する状況の類型と言語表現の関係を探った。また，社会的変数として，話し手と聞き手の心理的・社会的距離が，言語表現に与える影響についても調べた。さらに，面接調査では，互いが話すドイツ語の言語使用について相違点があるかどうか問うた。

その結果，トルコ系移民は，責任が第三者・外的要因にある「謝罪」の場面で，ドイツ人よりも，責任を強く感じると評価し，謝罪表現を多用することが確認できた。また，トルコ系移民並びにドイツ人ともに，聞き手との社会的距離が離れると，謝罪表現を使用するよりも，

状況を説明する言語表現を使用する傾向が見られた。そして，面接調査より，トルコ系移民はドイツ人が話すドイツ語を，距離があると感じており，一方で，ドイツ人はトルコ系移民が話すドイツ語に対して，直接的であるという印象を持っていることが示された。本発表では，これらの点について，さらに詳しく論じたい。

3. 過去の文字テクストの口語性はどのようにして測定可能か？ — 16 世紀のドイツ語に基づいた方法論的考察

芹澤　円

Ágel/Hennig（2006）は，新高ドイツ語期（1650 年以降）のテクストの口語性を算出する興味深いモデルを提案している。このモデルでは，ミクロレベル（語レベル）で口語的な要素（間投詞，1 人称代名詞，心態詞など）をひとつ見出すたびに 1 ポイントがカウントされ，またマクロレベル（文レベル）では基礎文（Elementarsatz）を構成する語数，主文と従属文の割合，応答詞や呼びかけ語のような文相当表現の頻度などがカウントされ，最終的に口語的な要素の総計を総語数で割り，口語性が算出される。発表者は，このモデルを 16 世紀中葉に書かれた 3 つのテクスト（「印刷ビラ」［Flugblatt］と「パンフレット」［Flugschrift］）に適用してみた。その口語性の算出により，各テクストが想定する読者や扱うテーマの違いによってテクスト間に口語性の相違があることが確認できた。ただし，例えば語末音脱落（*hab*, *solang*, *Leut* など）や異形（*auf* に代わる *uff* など）の場合のように，Ágel/Hennig（2006）が新高ドイツ語期のドイツ語について口語的要素とみなす言語現象すべてが 16 世紀中葉においても口語的であったと判断することはできず，個々の事例を判断するに際して，この時代における言語規範のあり方を十分に心得ておく必要があることがわかった。また，文語性の明確な特徴であるはずの複雑な従属文構造（箱入り文）の頻度を数値化することができないという点で，このモデルに改善の余地があることも判明した。

4. Einstellungsforschung – Neue Theorien, Methoden, Ergebnisse und Relevanz

Matthias Grünewald

Im Rahmen interkultureller Kompetenzvermittlung wird besonders intensiv betrachtet, wie Fremdbilder, Stereotypen, Vorurteile bzw. allgemein

Einstellungen als „zentrale Kategorien der Sprach- und Kulturvermittlung im Unterricht Deutsch als Fremdsprache“ (Althaus 2001) theoretisch und praktisch gefasst und empirisch operationalisiert werden können. Sowohl in eher quantitativ (z.B. Hann 1985, Krampikowsky 1991, Grünewald 2005) als auch qualitativen kulturwissenschaftlichen Forschungen (z.B. Bechtel 2003, Röttger 2004, Ertelt-Vieth 2005) fehlen jedoch intensivere Betrachtungen über Faktoren und Messverfahren der Bildung, Veränderung und Verhaltensrelevanz von Einstellungen. In der sozialpsychologischen Forschung über ‚attitudes and attitude change’ (z.B. Bohner/Wänke 2002; Crano 2008; Fazio 2008; Nelson 2009; Petty 2009) werden solche Aspekte kontrovers und kritisch diskutiert. Seit etwa 20 Jahren werden u.a. die Relevanz mentaler Repräsentationen ‚die Validität verbaler Aussagen oder der Zusammenhang zwischen Einstellung und Verhalten intensiv problematisiert und methodisch neu konzipiert.Vor diesem Hintergrund werden drei Thesen vertreten:

1. In aktuellen Fachbeiträgen und interkulturell ausgerichteten Forschungen des Fachs DaF bleiben die Entwicklungen der sozialpsychologischen Einstellungsforschung nahezu unberücksichtigt.
2. Eine vorschnelle und einseitige theoretisch-konzeptionelle und methodologische Fixierung mit der Gefahr von Artefakten führt langfristig zu einer Schwächung der wissenschaftlichen Anerkennung.
3. Die angemessene Adaption und Integration der Ergebnisse der Grundlagenforschung muss kulturspezifisch mit den japanischen Wahrnehmungs-, Verhaltens- und Lernbedingungen verknüpft werden.

ブース発表（16:00～17:30）　　G 会場：102 講義室

携帯電話用ドイツ語学習ソフトウェア開発と授業における実践

川村 和宏

いまや学生生活に欠かせない道具となった「ケータイ」や「スマホ」は，外国語教育の場面でも効果的に活用されるべきである。すでにドイツ語教育の分野でも，携帯電話向けのウェブサイトや動画配信などは散見される。ただ，携帯電話活用に伴う課題（学習機会の均等および経済的負担の軽減）を克服したソフトウェア教材はいまだに見られない。そこで発表者は，「携帯電話用 Flash プログラムによる初学者向

けドイツ語学習ソフトウェア」を企画・開発し，2010 年度から副教材として授業内で活用している。

本発表では，このソフトウェア開発の経緯や，実際の動作を紹介しながら，外国語教育の現場における携帯電話活用の実践について議論したい。発表の前半では，開発のポイントとなる考え方（マルチ・プチラットフォームやシリアス・ゲーム）を手がかりに，従来教育機関では携帯電話が十分に活用できなかった理由と，今回各社の携帯電話やインターネットで一様に動作するソフトウェアを作成したことにより上記の課題を克服した経緯を解説する。

発表の後半では，実際に携帯電話やインターネットを用いてソフトウェアの実演を行う。さらに，2010 年度に実施した授業アンケートの結果や，2011 年度に実施しているアクセス記録と学習効果の分析についても紹介する。

最後に，今回開発したソフトウェアと連携する初学者向けドイツ語教科書作成の試みについて報告する。

第 2 日　10 月 16 日（土）

シンポジウム VI（10:00～13:00）　　A 会場：大講義室 A

エーリヒ･ケストナーとその時代
Erich Kästner und seine Zeit

司会：寺井 紘子

本シンポジウムは，エーリヒ･ケストナー（1899-1974）に焦点を当て，①表現媒体，②時代，③研究方法という三つの点から多角的にアプローチすることによって，児童文学作家としてのイメージを超えた新たなケストナー像を浮き彫りにするとともに，1920 年代から戦後に至る，ケストナーが生きた時代の表象を立体的に再現することを目的とする。

①表現媒体：

ケストナー作品のなかでも，長編小説，映画のためのシナリオとその映画，そして風刺詩を考察の対象とする。これら異なるジャンルの作品を個々に扱うことによって，児童文学作家としてのケストナー像にとどまらない，作家の創作態度，世界観を詳らかにする。

②時代：

ケストナーの青年期にあたるヴァイマル共和国にはじまり，執筆禁止の苦難とそこからの一時的解放期における屈折した表現が特徴的となるナチス政権下，そしてナチス時代が終結した戦後に至るまで，およそ 20 年に亘る時代を包括的に扱う。それぞれの作品における社会的背景やそれに応じた作家の時代意識を明らかにすることで，20 世紀前半のドイツの歩みを辿る。

③研究方法：

各発表者は，ケストナー専門家ではないが，自らの専門領域で培った独自の研究手法をケストナー研究に適用することで，新たな知見を開拓する。

第一発表者（寺井）は，1931 年の長編小説『ファービアン』を扱い，この作品に見られる身体的表象にスポットを当てる。その際，当時の画家の絵画作品を比較考察の対象とし，それらを，単なる風俗描写にとどまらない身体意識の表れと見る。第一次大戦後のドイツの文学または絵画において，身体がどのように扱われ，描かれていたのかがテーマとなる。

第二発表者（青地）は伝記的なアプローチを試みる。ナチス時代に

制作された映画『ほら男爵の冒険』において，ユダヤ性が悪と描かれるのではなく，むしろこの作品を支える重要なモチーフとなり，ゲッベルスのプロパガンダの裏をかいていることを指摘する。さらにこの背景には，ケストナーの父親が，本当にエーミールであったのか，それとも母の主治医ツィンマーマン先生であったのかという問題があることを指摘する。

第三発表者（児玉）は，同じ『ほら男爵の冒険』を扱うが，権力体制と科学者との関わりという観点から，権力批判を読み取る。手がかりとなるのは，ケストナーが用いたペンネーム「ベルトルト・ビュルガー」である。そこには，ブレヒトとゴットフリート・アウグスト・ビュルガーの存在が示唆されていた。この二人の作家を援用しながら，ケストナーの権力に対する危機意識を明らかにする。

第四発表者（永畑）は，考察の手がかりとして風刺詩を用いる。とりわけ「1945 年の行進曲」に注目し，他の作家の作品との比較考察を行うことで，第二次世界大戦の敗戦に伴う旧ドイツ領からのドイツ人の逃亡・追放の問題に迫る。これにより東方避難民を扱った時代の記録者としてのケストナー像を鮮明に浮かび上がらせる。

1. 大都市における身体の表象
— 第一次世界大戦後のケストナー，グロス，ディックス —

寺井 紘子

ケストナー唯一の長編小説『ファービアン』(1931）を取り上げ，そこに窺える身体の表象のあり方を，同時代の画家ジョージ・グロス，オットー・ディックスの作品と比較考察する。

この小説は，発表当初から描写の過激さによって物議を醸していた。大都市ベルリンの裏の顔，売春や暴力，殺人などが赤裸々に記されていたからである。そこには社会に対する痛烈な批判が見て取れる。同様のモチーフが，グロスやディックスの絵画にも特徴的に描き出されており，ケストナーと同じく，戦争に対して，社会に対して，権力に対しての批判的精神が彼らの創作の原動力となっている。だが，ケストナーの文学作品とこれら同時代絵画は，その類似性にも関わらず，これまで十分な比較研究がなされてこなかった。

本発表では，これらの作品において，人間の身体がどのように表象されているかに注目し，この時代における身体性について考察する。当時は，戦争によって体の一部を失った負傷兵の存在がひとびとの日常意識に入り込み，また，急速に発達した大都市のいわば陶酔状態の

中で，肉体の軽視が蔓延しつつあった。その状況から生まれた身体意識が彼らの作品には反映していると考えられる。同時に，彼らの作品において特徴的なのは，人間の身体がしばしば，都市という枠組みの中に据え置かれていることである。したがって，ここでは，人間の身体の表象と，それに対置される都市の双方に注意を向けたい。

2. 映画『ほら男爵の冒険』とふたりの父親の統合

青地 伯水

ケストナーの証言によれば，1914 年，母親の口から，実の父親が母の主治医ツィンマーマン先生であったと聞かされる。(とはいえ遺伝的な意味での父親が，どちらであるかは，不明のまま（ハヌシェク 1999) である。）これにより，ケストナーの内面は，ふたりの父親によって引き裂かれる。そこで本発表では，映画『ほら男爵の冒険』は，ケストナーがふたりの父親の一方と決別し，他方に父親像を統合する試みという仮説のもとに議論を展開する。なお,『ほら男爵の冒険』について，ナチスの制作意図からや（Rentschler1996)，映画技法から（Schulenburg 2004）は研究されているが，伝記的アプローチはない。

ケストナーは，ほら男爵ミュウンヒハウゼンが，ナチス時代の現在に至るまで生きて冒険譚を語るという設定をくわえた。そしてこの設定を支える挿話が，18 世紀の実在の魔法使いカリオストロ伯爵との邂逅である。映画の中でミュウンヒハウゼンがカリオストロと出会い，永遠の若さを授けられるのは，ポーランドのミタウ近郊であり，カリオストロの伝記から 1879 年のことと特定される。また，カリオストロ研究の基本的文献エリーザベト・フォン・デア・レッケの『カリオストロのミタウ滞在』では，この年に刊行されたレッシングの『賢人ナータン』に言及がなされている。ケストナーはカリオストロの資料を読むなかで，父から子への指輪による秘儀の伝授を脚本に取り入れたのである。

3. 科学者と権力者
— ケストナー『ほら男爵の冒険』とその周辺

児玉 麻美

ケストナーが「ベルトルト・ビュルガー」という筆名で発表した映画脚本『ほら男爵の冒険』（1942 年）を中心的に取り上げる。先行研究において焦点となっているのは，ケストナーのナチス協力に関する

問題である。国威発揚を目的とした娯楽映画製作に関与し，莫大な報酬を受け取ったことに対して厳しい批判の目が向けられる一方で，作中には権力者への批判を匂わせる台詞が少なからず存在し，そこにケストナーのひそかな反逆意識を読み取ろうとする研究も多い。とりわけ，科学の自由を信じる気球乗りブランシャールと，それを「迷信にすぎない」と一蹴するヴェネツィア総督との対話は頻繁に取り上げられるが，ケストナーが典拠としたG.A.ビュルガーの作品『ミュンヒハウゼン男爵の冒険』においては，ブランシャールはルイ16世から報奨金を受け取って気球飛行を披露した強欲な野心家として風刺の対象になっている。また，異端審問所による強権支配が否定的に描かれている点は，ベルトルト・ブレヒトの『ガリレイの生涯』における近代科学批判の先取りであるとも指摘されており，注目に値する。

これらのエピソードを参照しながら，科学の力によってうみだされた新発見が，人類に幸福をもたらすことを期待されながらも，権力に取り込まれていってしまうという危機的状況の描写に注目し，ケストナーのテクスト中に展開される近代科学批判を明らかにしたい。

4. 被追放者を描いた文学　—「1945年の行進曲」—

永畑 紗織

エーリヒ・ケストナーの「1945年の行進曲」は，第二次世界大戦の敗戦に伴って旧ドイツ領から逃亡することとなったドイツ人避難民を描いた詩である。東方避難民をテーマにした文学作品についての包括的な研究は，Helbigらによりなされているが，それらの研究の中では「1945年の行進曲」への言及はない。しかし，シャンソンという形で多くの人々の耳と心に働きかけたこの詩は，ドイツにおけるケストナーの影響力の大きさに鑑みても，無視し得ないものである。

ドイツ人の逃亡・追放というテーマは，東側占領地区においては終戦直後から一貫してタブーであったため，比喩的な表現で暗示的にこのテーマを扱う文学作品が生まれた。西側でも，時代が下るとこのテーマを扱うことへのある種の躊躇が生じた。つまり，ナチスの罪を棚に上げてドイツ人の被害者性を強調し，戦前の領土を取り返そうとしている，と捉えられることをよしとしない作家たちは，この問題を扱うことに慎重になったのである。

それに対して，終戦直後の西側占領地区で書かれた「1945年の行進曲」は，すべてを失った被害者としても見られ得る若い女性を主人公に据えて，直接的な言葉で逃亡・追放を描いている。本発表では，「1945

年の行進曲」をドイツ人の逃亡・追放をテーマとした他の文学作品と比較し，この出来事に明瞭な表現を与えたこの詩がむしろ貴重な作品であることを明らかにする。

シンポジウム VII（10:00～13:00）　　B 会場：AV 講義室

動物とドイツ文学
Tiere in der deutschen Literatur

司会：松村 朋彦

「動物の権利」や「生物多様性」をめぐる議論を通して，「動物」は現代の世界においてもっともアクチュアルなテーマの一つとなっている。ドゥルーズ，デリダ，アガンベンといった現代の思想家たちもまた，「人間」と「人間ならざるもの」とのあいだの境界が流動化しつつある現代の状況をふまえて，西洋文明の根底をなす人間中心主義を問いなおすという視点から，「動物」について論じている。だが，こうした問題提起はけっして現代に固有のものではなく，18 世紀にその淵源を見いだすことができる。伝統的なキリスト教的世界秩序の相対化と，自然科学上の新たな発見にともなって，18 世紀ヨーロッパの思想家や文学者たちは，人間と動物とのあいだの連続性と非連続性を，新たな視点から捉えなおす必要に迫られる。そしてこの問題意識は，18 世紀後半から 19 世紀前半にかけてのドイツ文学にも受けつがれてゆくのである。

19 世紀中葉にダーウィニズムが登場すると，人間と動物とのあいだの連続性は，自然科学的な根拠をあたえられる。だが，19 世紀末以降のドイツ文学にあらわれる動物たちは，人間とのあいだの連続性よりはむしろ，非連続性を体現する傾向をいっそう強めてゆくように思われる。そもそも，人間自身の鏡像であると同時に，あるときは人間をおびやかし，またあるときは人間の憧れの対象となる他者でもあるという二重性が，文学における動物表象を特徴づけている。18 世紀啓蒙主義が，人間と動物とのあいだの連続性という視点からこころみた人間中心主義への問いかけを，世紀転換期の文学は，他者としての動物という視点からさらに先鋭化させる。だがその一方で，20 世紀のドイツ文学には，人間と動物との一体化を通して，ヒューマニズムの新たな可能性を模索しようとする試みもまた見いだされるのである。

人間主義と人間主義批判とのあいだのせめぎ合いの場としてのこう

した動物表象の役割を，ドイツ文学全般にわたって明らかにしようとする研究は，日本はもとよりドイツ語圏においても，これまでほとんど行われてこなかった。本シンポジウムは,「動物」というテーマに関心を寄せてドイツ文学研究をおこなってきた４人の報告者の発表とそれにもとづく討論を通して，18 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのドイツ文学において，動物の表象がはたしてきた役割とその変遷を跡づけようとする試みである。むろん，わずか４人の発表によって，この広大なテーマを論じつくすことは不可能である。だが，本シンポジウムを４つの個別発表の羅列に終わらせないための工夫として，それぞれの発表者が個別の作家論や作品論をこえた歴史的な展望を提示することによって，発表相互間に対話の要素を盛りこむことをこころみたい。また，それに続く討論では，発表では論じられなかった作家や作品も視野に入れて，さらに議論を深めてゆくことにしたい。

1. 猿が言葉を話すとき ― ホフマン，ハウフ，カフカ

松村 朋彦

18 世紀以降の西洋にみられる人間と動物とのあいだの連続性と非連続性をめぐる議論において,「猿」は特権的な位置をしめている。そのさいに，とりわけ重要な論点の一つが,「言語」の問題だった。こうした背景をふまえて，本発表では,「人間になった猿」というモティーフを扱った３篇の作品，ホフマンの『ある教養ある若者についての報告』(1814)，ハウフの『人間としての猿』(1827)，カフカの『あるアカデミーへの報告』(1917)を,猿の言語習得という観点から考察する。ホフマンの猿ミロが言葉を学ぶ過程は，人間社会の愚かしさを映し出す鏡となっている。だが，自らのうちに動物性を残しながらも，その人間化の過程を得々として報告するミロにたいするホフマンの皮肉なまなざしは，この作家がけっして人間中心主義を放棄してはいなかったことを示している。他方ハウフの作品は，外国語を話すオランウータンという，ポーの『モルグ街の殺人』(1841) のモティーフを先取りし，市民社会の他者としての猿の姿を描き出す。そして，カフカの猿ロートペーターは，人間化の過程を「逃げ道」と呼び，アルコールの力を借りて蓄音機から言葉を学ぶことによって，人間中心主義を脱構築する。こうして，人間の言葉を話す猿たちは，人間と動物とのあいだの連続性を体現するかのようにみえながら，人間社会をその外部から照らし出す他者としての性格を，時代とともにしだいに強めてゆくのである。

2. 動物の認識能力とはなにか？
— 18 世紀の動物に関する言説とホフマンの猫

土屋 京子

ホフマンの『牡猫ムルの人生観』（1820-22）は，猫ムルと人間クライスラーについて語ったふたつの伝記小説からなる。クライスラーは自分の名前の由来を語るときに，人間の生そのものを取り囲む「円環（Kreis）」のイメージを喚起し，「狭い円環」のなかに縛りつけられた人間の認識能力について論じた。さらに，限界をもっている人間の思考，認識では，一様に「本能（Instinkt）」と呼ばれている動物の精神能力の多様性，深淵は計りえないものだと語り，猫ムルとの生活をはじめることを決心する。こうしてこのふたつの伝記は，はじめて交差することになるのだ。

『牡猫ムル』の人間中心主義批判についてはすでに，近代的自伝の脱構築という観点から Sarah Kofman（1984）が，人間の認知世界の仮象性に関する論点から Peter von Matt（2005）が論じているが，動物に関する同時代の言説との関連性については，まだあまり論じられていない。本発表は，理性に光をあて人間中心主義を切り開いた啓蒙思想家たちの動物の認識能力に関する言説を参照し，ホフマンの動物観を考察する。そのさい，手がかりになる言葉が「悟性（Verstand）」である。ホフマンは，動物ムルの認識能力が「verstehen」を語源とする「悟性」であると仮定し，黙して語らない動物の精神性を問題にしたのだ。

3. 人間のような犬と，犬のような人間
— エーブナー＝エッシェンバッハ，リルケ，カフカ

川島　隆

リルケの『マルテの手記』（1910）やカフカの『訴訟』（1914），『ある犬の探究』（1922）などの動物表象は，これまで特にダーウィニズムとの関連で，西洋近代を特徴づける人間中心主義への批判として解釈されてきた（Margot Norris (1985, 2010)，Cornelia Ortlieb (2007)，Jochen Thermann (2010)，Hadea Nell Kriesberg (2010)）。しかし，これらの研究においては，19 世紀社会においてダーウィニズムが政治・社会の分野でリベラリズム／ヒューマニズムの伝統と強く結びついていたことが顧慮されていない。また，エーブナー＝エッシェンバッハの『クランバンブリ』(1883)に見られるように，19 世紀リアリズム文学に描かれる「犬」には，しばしば「人間らしい」規範が投影され，それは社会

の中で人間が置かれた状況を照らし出す，社会批判的なモティーフとして流通していた（Serena Grazzini (2001)，Dorothee Römhild (2005)，Wolfgang Bunzel (2007)）。19 世紀文学における「犬」は，リベラリズムの動向と連動するヒューマニズム的な価値観の普及を示す，一つの指標だったのである。ところが，世紀転換期に高揚したネオ・ロマン主義の思潮を受け,「犬」はむしろ人間的なものの「外部」を指し示し，ヒューマニズムの限界を表現する器として機能するようになる。本発表では，このようなダイナミズムを視野に入れつつ，19 世紀文学における「犬」と，リルケやカフカの「犬」のあいだの連続性と不連続性を明らかにする。

4. 「犠牲」にみる神と人間と動物 ― トーマス・マンを中心に

千田 まや

発表の前半では，世紀転換期の文化人類学，旧約聖書研究，神話学，ツーリズムの進展をふまえ,「供儀」における神と人間と動物の同化（代替可能性）という観点から，ホーフマンスタールの『詩についての対話』（1903）とマンの『ヴェニスに死す』（1912）を比較する。両者はショーペンハウアーの思想をベースに，人間の自意識の奥底にある衝動の解放を，供儀における「人ならざる存在」すなわち神＝動物との一体感として表現した点で共通するのだが，その後方向性が分かれる。

発表の後半では，マンの『ヨゼフとその兄弟たち』（1926-1942）における，人間中心主義の回復の試みについて論じる。マンは，フロイト，フレイザー，ロバートソン・スミス等の供儀論を取り込み，ユダヤ教のみならず，古代オリエントの再生神話をふまえて「供儀」の様々な形式を描いた。その際,「供儀」の両義性，すなわち，命を絶つ暴力性と再生への希望が，犠牲を捧げる側の動物化と，供儀動物の人間化の対比によって示される。

ホーフマンスタールを「供儀」の観点から論じた先行研究には E.Wellbery（2003）があるが,「供儀動物」という観点に立ったマン論はまだないので，本発表はその穴を埋める試みと位置付けられよう。

シンポジウム VIII（10:00～13:00）　　C 会場：レクチャーホール

Grundwortschatz Deutsch:
lexikografische und fremdsprachendidaktische Perspektiven

司会：Saburo Okamura / Willi Lange

Der Sprachunterricht für (fortgeschrittene) Anfänger ist eine der Hauptaufgaben vieler japanischer Germanistinnen und Germanisten. Dabei stellt sich auch immer wieder die Frage, welchen Wortschatz die Studierenden in welcher Reihenfolge mit welchen Methoden erwerben sollen, um möglichst schnell und möglichst effektiv zu authentischer Interaktion fähig zu werden. In der Grundwortschatzdiskussion lassen sich drei Hauptströmungen unterscheiden:

a. frequenzorientierter Ansatz: frühe Beispiele: Pfeffer (1970), Rosengren (1972-1977); aktuelle Beispiele: Jones/Tschirner (2006), Tschirner (2008); Datenbasis: meist Zeitungstexte; Hauptkriterium der Selektion: Häufigkeit eines Wortes

b. kommunikativ-pragmatischer Ansatz: frühe Beispiele: Baldegger/u.a. (1980), Volkshochschulverband/Goethe-Institut (1985), Glaboniat/u.a. (2005); Datenbasis: keine; Hauptkriterium der Selektion: kommunikative Relevanz

c. lexikografischer Ansatz: Beispiele: Schnörch (2002), Haderlein (2008); Datenbasis: Wörterbücher/Wortschatzsammlungen; Hauptkriterium der Selektion: Schnittmengenbildung oder Bündel aus statistischen Maßen und Introspektion

Mit dem Lernerwörterbuch von Jones/Tschirner (2006) und „Lextra. Deutsch als Fremdsprache. Grund- und Aufbauwortschatz nach Themen“ von Tschirner (2008) liegen Lehrmaterialien vor, die dem frequenzorientierten Ansatz verpflichtet sind. Innerhalb des kommunikativ-pragmatischen Ansatzes spielt die deutsche Ausarbeitung des Europäischen Referenzrahmens „Profile“ Glaboniat u.a. (2005) eine besondere Rolle, an dem sich die Internationalen Fertigkeitsprüfungen für Deutsch (Start 1, Start 2 und das Zertifikat Deutsch) orientieren. Das hat zur Folge, dass auch die Lehrwerke, die auf diese Prüfungen vorbereiten, sich ebenfalls stark auf das Vokabular von „Profile“ beziehen. Der lexikographische Ansatz spielt nicht zuletzt heute in Japan auch deshalb eine Rolle, weil die ungefähre Schnittmenge des Wortschatzes von

Anfängerlehrwerken bzw. von „wichtigen Wörtern in Wörterbüchern“ eine Grundlage für die Erstellung von Fertigkeitsprüfungen darstellt.
Ziel des Symposiums ist es, eine Debatte über die Vor- und Nachteile der skizzierten Zugänge zum Grundwortschatz zu führen. Vorgesehen sind Beiträge
1. zum Begriff des Kernwortschatzes und dem Spannungsverhältnis zwischen Kernwortschatzforschung und den Anforderungen der Fremdsprachendidaktik (Zaima),
2. zur Empirie der Bestimmung von Kernwortschätzen und den Wortschätzen in Lehrwerken (Bubenhofer; Okamura / Lange / Scharloth),
3. aus der Perspektive der Fremdsprachendidaktik zu Formen korpusgestützten Lernen (Iwasaki)
4. und aus der Perspektive des Wortschatzerwerbs im Hinblick auf Grenzen des Umfangs und Art des Wortschatzes (Werner / Kattou)
Auf der Basis dieser kritischen Bestandsaufnahmen sollen mögliche Folgen für den Deutschunterricht in Japan diskutiert werden.

1. ドイツ語初級文法学習という視点からの「基本語彙」

在間　進

「基本語彙」という概念は，極めて重要かつ一般的であるのにもかかわらず,「基本語彙」とはそもそも何かに関する議論は，これまで十分になされて来なかった。

本発表では,「基本語彙」に関する以下のような点について私の考察を述べる。

①「基本語彙」の「基本」という概念について — 特に,「基本」の定義に際し，どのような視点，特性，問題点などが問題になるかについて述べる。何を「基本」とし何を「非基本」とするかは，要するに「人為的」なのである。

②「基本語彙」の「語彙」という概念について — 特に,「基本語彙」の設定は，語彙の設定で終わらず，その語彙のどの意味用法なのかについても記載されねばならないこと，したがって，現時点での，コーパス利用における使用頻度調査には相当の限界があることを述べる。

③具体的なドイツ語教育との関わりについて — 特に，ドイツ語の「基本語彙」設定の目的がドイツ語学習の効率化にあるとするならば，ドイツ語学習教材との関連で検討されるべきものであること，そしてさらに言えば，ドイツ語の学習体系そのものの確立が不可欠であるこ

とを述べる。
　以上の考察に基づく結論として,「ドイツ語初級文法の学習を想定した基本語彙」研究が「最も望ましい」ということを述べるわけであるが，さらに残された課題として，基礎的なコロケーション（語結合）の研究があること，そして，このような試みの場合，最も軽視され，しかしながら，最も重要なことは，それぞれの仮説の有用性が実践的に検証されることであることを述べる。

2. Lehrwerke und Referenzwortschätze: Der Nutzen frequenzbasierter Grundwortschätze

Noah Bubenhofer

Die Fragen nach dem Umfang des Grundwortschatzes und der Abfolge, in der der Wortschatz gelernt werden soll, sind für den Fremdsprachenunterricht zentral. Eine Vorgabe dafür liefert beispielsweise der Europäische Referenzrahmen „Profile“. Ein anderes Konzept verfolgen die frequenzbasierten Ansätze, die auf der Grundlage großer Korpora einen zu vermittelnden Grundwortschatz ableiten. Es stellt sich die Frage, wie stark sich die Lehrwerke an diesen Referenzwortschätzen orientieren. Im Vortrag soll der Frage nachgegangen werden, wie sich das bei einigen japanischen Deutsch-Lehrbüchern für Anfänger verhält.
Das Deutsche Referenzkorpus DeReKo des Instituts für Deutsche Sprache (IDS) ist mit knapp 4 Mia. Wortformen das größte öffentlich verfügbare Korpus deutscher Sprache. Daraus wurden verschiedene korpusbasierte Wortlisten ("DeReWo") generiert, die als Ausgangsbasis für die Bestimmung eines frequenzbasierten Wortschatzes dienen könnten. Mit automatisierten Verfahren kann nun die Übereinstimmung der Wortschatzprogression der japanischen Lehrwerke mit dieser DeReWo-Wortliste gemessen werden. Ergänzend dazu soll der Referenzwortschatz „Profile“ auf gleiche Art und Weise mit den japanischen Lehrwerken verglichen werden.
Mit dieser Analyse werden nicht nur die Lehrwerke bezüglich ihres Umgangs mit dem zu vermittelnden Wortschatz auf den Prüfstand gestellt, sondern auch ein frequenzbasierter Wortschatz mit dem einflussreichen Profile-Wortschatz verglichen.

3. Methoden der Bestimmung des Kernwortschatzes Deutsch

Saburo Okamura / Willi Lange / Joachim Scharloth

Die Bestimmung des Kernwortschatzes ist für die Disziplin DaF von zentraler Bedeutung. Sie bietet nicht nur Lernenden eine wichtige Orientierung, welche Wörter zentral für eine gelingende Kommunikation sind, Kernwortschätze sind auch eine wichtige Grundlage für die Erstellung von Lehrbüchern und Curricula. Umso mehr verwundert es, dass eine Diskussion über Prinzipien bei der Zusammenstellung von Grund- und Aufbauwortschätzen bislang kaum geführt wird. Obwohl es eine Vielzahl von Grund- und Aufbauwortschätzen zur deutschen Sprache gibt, haben doch alle das Problem, dass sie nicht auf transparenter empirischer Basis zusammengestellt wurden. In den meisten Fällen handelt es sich um Wortlisten, die auf der Basis individueller Kenntnisse und Erfahrungen von Lehrenden oder Wissenschaftlern zusammengestellt wurden, seltener fußen sie auch auf Recherchen in kleineren Textsammlungen (Korpora).
Wir werden unterschiedliche Ansätze, den zentralen Wortschatz des Deutschen zu bestimmen, vorstellen und daraufhin befragen, inwieweit die angewendeten Auswahlkriterien objektivierbar sind: den kommunikativ-pragmatischen Ansatz (Baldegger/u.a. (1980), Volkshochschulverband/Goetheinstitut (1985), Glaboniat/u.a. (2005)), den lexikografischen Ansatz (Schnörch (2002), Haderlein (2008)) und den frequenzorientierter Ansatz (Pfeffer (1970), Rosengren (1972-1977), Tschirner (2008)). Im Anschluss werden wir unsere eigenen Ansatz einer korpusgeleiteten Bestimmung des Kernwortschatzes und die Ergebnisse erster Berechnungen zur Diskussion stellen.

4. 日独例文コーパス DJPD を利用した語彙学習

岩崎 克己

DJPD（Deutsch-Japanisches Parallelkorpus für Deutschlernende）は，広島大学において，日本人のドイツ語学習者用に開発されたオンライン型の日独例文パラレルコーパスである。DJPD は，23,000 個のドイツ語例文とその日本語訳からなり，そのうち 14000 個が Web 上で提供されている（www.vu.hiroshima-u.ac.jp/deutsch/）。すべてのドイツ語例文は，それぞれ，ヨーロッパ言語共通参照枠における A1 から B2 レベルまでの単語（動詞 700 語，形容詞 500 語，名詞 2700 語）を基に作られ

ている。それらを，日本語やドイツ語のキーワードを指定して検索することで，それらのキーワードを含む例文を，あらかじめ指定した数だけ表示できる。アステリスクや二重引用符を利用したいくつかの検索技法を使うことで，複雑な検査も可能である。

本発表では, DJPD を利用した初級段階のドイツ語授業における語彙学習について報告する。コーパスには，言語研究の手段としては，すでに長い歴史がある。しかし言語教育の手段としては，文脈を読み取る能力を前提にするコーパスは，主に中級以上の学習者向けの道具として見なされ，日本のような初級段階の学習者が多い教育環境では広がらなかった。けれども，使い方次第では，初級レベルの語彙学習においてもコーパスは十分利用可能であり，自己発見型学習の道具として非常に有効である。なお，本発表では，さらにインターネット自体を一つのコーパスと見なした語彙学習の実例についても触れたい。

5. Der Grundwortschatz in wortschatzdidaktischer Perspektive

Angelika Werner / 甲藤 史郎

Wortschatzerwerb ist eine autonome selbständige Tätigkeit und immerwährende Aufgabe des Lerners, die aber bewältigbar sein muss, durch die Auswahl, Begrenzung der Menge und Anwendbarkeit der zu lernenden Einheiten. Aus Lernersicht stellt sich daher die Frage, wie Wortschatz strukturiert und wie die Lehrmittel aufbereitet sein müssen, damit Lernfortschritte möglichst effizient erfolgen können. Hierzu formulieren wir zwei Hypothesen:

1) Für Anfänger bis zum Niveau B1 (GER) sind deshalb Nomen, Verben und Adjektive aus dem alltäglichen Leben wichtig. Funktionswörter haben zwar – genau wie grammatische Einheiten – ein statistisch hohes Vorkommen, sind aber kommunikativ nicht sehr relevant.

2) Die Darstellung des Kernwortschatzes in Form eines Grundwortschatzes sichert keinesfalls den Lernerfolg. Vielmehr erleichtert das Lernen als Chunks, Phraseologismen oder im Kontext mit Kollokationen das Behalten im Langzeitgedächtnis, das rezeptive Wissen, stetige Wiederholung und Gebrauch sichern ein schnelles Produzieren.

Forschungsgegenstand ist eine effektive Wortschatz-Arbeit nach dem Methoden-Wechsel im FS-Unterricht in die kommunikative und interkulturelle Richtung, wobei die Vermittlung am handlungsorientierten Gemeinsamen Europäischen Referenzrahmen ausgerichtet ist, und die

Theorie für den DaF-Erwerb sich auf der Lernerseite am kognitiven Kostruktivismus oder Konnektionismus (Wolff 2002, Schmid 2010) ausrichtet. Anhand einer Fallstudie bei japanischen Deutsch-Studierenden sollen Hinweise für einen effektiven Unterricht vorgestellt werden.

口頭発表：文学 4／文化・社会 4（10:00～12:35）

D 会場：101 講義室

司会：北村 純一，別本 明夫

1. 『パレオフロンとネオテルペ』
― バロック的祝祭から見たゲーテの宮廷祝賀劇

橋本 由紀子

『パレオフロンとネオテルペ』は，1800 年にゲーテがザクセン＝ヴァイマル公国のアンナ･アマーリア太后 61 歳の誕生日を祝して捧げた機会劇であり，「旧時代」を表す叔父パレオフロンと「新時代」を表す姪ネオテルペの対立と和解を描くと同時に，ヴァイマル宮廷での実生活において新旧対立の調停役に努めたアンナ・アマーリアを賞賛する内容の一幕劇である。この作品は，従来のゲーテ研究において殆ど重要視されてこなかったに等しい。だが，ここに描かれる新時代と旧時代の対立というテーマは，ほぼ同時期に書かれた『ファウスト第一部』の「ワルプルギスの夜の夢」にも見られるため，間接的とはいえ彼の代表作と関わりを持つ点で，看過できない小品と言えよう。

この機会劇に関して，僅かな先行研究の一つ Petak による議論では，ロマン主義を連想させる点が指摘されている。だが，この作品はバロック期に確立された宮廷祝賀劇の伝統に則して制作されていることから，バロック文化からの議論を試みる余地もあると思われる。そこで，本発表では，『パレオフロンとネオテルペ』を，バロック期の宮廷祝賀劇の中で類似のテーマ設定を持つ『美と徳の抗争』（1678 年頃）と比較し，登場人物の人数，舞台装置の規模，登場人物の名前に使われる言語，観客との距離感，劇中で賞賛される王侯の位置づけ，「美と徳」および「新時代と旧時代」のそれぞれの抗争の解決方法等について検討する。『パレオフロンとネオテルペ』のバロック的祝賀劇との類似点と相違点を解明することにより，この小品が王侯の祝賀劇を装ったゲーテの時代考察であることを主張したい。

2. 胡椒，媚薬，バルサム・・・
― 中高ドイツ語叙事詩における香料 ―

渡邊 徳明

12，13 世紀の中高ドイツ語叙事詩には，香料（あるいは香辛料）が描かれる場面がある。例えば『パルチヴァール』の聖杯城ではバルサムが焚かれ，リグヌム・アロエの香りが漂い，当時高価であった胡椒も食事に用いられる。『トリスタン』では愛する二人が飲む媚薬が問題となるが，中世には媚薬用の香料が実際に出回っていたとも言う。また，この『トリスタン』では「バルサムを塗られた愛」（diu gebalsemte minne, Tr.16831）という表現が現れる。このバルサムが一体どのような風味なのかによって，「愛」の具体的イメージは変わって来よう。このような香料は，その稀少性，香りがもたらす高揚感と解放感，更にはエキゾチックなイメージによって特徴づけられ，作品中の場面の描写に用いられた際には，読者・聴衆の関心を惹いたことであろう。香料の描写がどのような効果をもたらしたのかを探るためには，中世の人々がこれらの香料についてのどのような性質を知っていて，どのような効能を期待し，また実際にどのように使用していたのか，ということを知らねばなるまい。従来，中世ドイツ文学の研究において，香料描写についての積極的な考察がなされた形跡は目立たぬのであるが，既に古代ギリシャ・ローマの文献には，香料の原料となる植物についての解説がなされていたのであり，中世の人々がそのような文献から影響を受けたことは見逃せない。本発表では中世における香料についての知識伝承を踏まえながら，中高ドイツ語叙事詩の香料描写について考察したい。

3. ドイツにおける「ブッククラブ」の歴史と研究の観点

竹岡 健一

「ブッククラブ」（Buchgemeinschaft）とは，端的に言えば，その会員のみを対象に，特定の本を，カタログを通じて定期的に販売する団体である。本の引渡しは基本的に通信販売によってなされ，一般の書店で流通するものと内容は同じだが版の異なる本が，市価よりも安く売られることが多い。このような書籍販売形式は，ドイツにおいて 19 世紀後半から発達し，文学作品の普及においても大きな役割を果たしており，ドイツのゲルマニスティクにおいても研究対象として重視されているが，日本のゲルマニスティクではこれまでほとんど取り上げ

られていない。本発表では，ドイツにおける先行研究を踏まえて，主に次の３点を論じる。(1) ブッククラブの概念規定と，一般の書籍販売形式との相違。(2) ブッククラブの歴史。具体的には，1900 年頃までの前史，1900 年頃から 1933 年までの成立期，ナチ時代，1945 年から 1960 年代までの発展，および各々の時期に存在した個々のブッククラブの特色。(3) ブッククラブに関する研究の着眼点。具体的には，成立の契機，概念規定，歴史，活動方法（組織，販売，図書の種類，価格，装丁，勧誘，雑誌，会員構成など）とそれに基づく分類，一般の書籍販売との関係など。

以上により，ゲルマニスティクにおけるブッククラブの研究対象としての重要性と文学研究におけるブックマーケティング的な観点の重要性を明らかにしたい。

4. 複雑系としての文学 ― ベキ則，乗算性，固有名：ドイツ文芸出版データによる調査をもとに ―

名執 基樹

ドイツでは 80 年代から文学現象をシステム（活動／コミュニケーションの関連体）と捉える観点が論じられてきた。しかし， 90 年代の文学システム論争（経験的文学研究／文芸社会史派 vs. ルーマン派）以降，目立った進展はない。一方，この間，物理学的な諸研究ではベキ則をはじめとした複雑系としてのシステム現象の数理的理解が急速に進み，社会学で「複雑論的転換」（J.Urry）が提案されるなど，影響を与え始めている。

この発表の狙いは，この種の複雑論的把握が文学現象においても妥当性を持つことを示す事にある。この発表では，ドイツ出版図書目録をもとに，文芸書の流通件数がベキ則（$y=\alpha x^{-\beta}$）に従う形で分布する点，件数規模 S_1 が次の時点の規模 S_2 へ乗算的に（揺らぎ R(t)を介し $S_2=R(t)\times S_1$ の形で）成長する点を，現役作家，それ以外の作家の例で確認してゆく。

複雑系研究では，乗算過程を背景にベキ則現象が成立することが知られている。過去の規模に対し乗算的に成長が起こると言うことは，文学現象が物理的な再帰構造を背景に成立していることを意味する。ここから，文学現象がフィズィカルな作動関係の中で自己組織的に振舞うハイブリットな複雑系としてモデル化しうる点，調査方法として，作家名など固有名に注目する調査方略が有効である点を指摘する。

口頭発表：語学 3（10:00～11:55）　　E 会場：103 講義室

司会：黒田　廉，宮下 博幸

1. 状態受動と過去分詞形形容詞について

野間 砂理

過去分詞形を複合語の第二構成要素（主要部）とする複合形容詞は，元となる能動文の構造から状態受動文を経て複合形容詞化されるまでの派生過程を分析することによって，以下の 3 種類に分類することができる。

(A)　項を取り込む語類(ernährungsbedingt)
(B)　付加詞と結合する語類(handgeschrieben)
(C)　完全に語彙化された語類(sehbehindert)

(A)の語類は，一定の統語的操作により能動文から受動文を経て複合形容詞が作られる。そのため，複合形容詞の第一構成要素として取り込まれる項の意味役割は一つに限定される。次に(B)では，過去分詞が複合形容詞化されるまで，(A)と同じ派生過程を辿るが，一旦，形容詞化されると文脈の語用論的な支えによって異なる意味役割を担う付加詞と結合する。そして完全に語彙化された複合形容詞(C)では，能動文あるいは受動文への変換そのものが意味論的に著しく制限される。

先行研究では，過去分詞形複合形容詞が語彙化された複合形容詞として捉えられてきたため，主に形態論の領域での第一構成要素の品詞特定ならびに意味役割の記述が中心であった。しかし，これらの語類の派生過程については殆ど言及されていないため，その記述から語形成における規則を導き出すことはできない。そこで本発表では，能動文から複合形容詞化されるまでの，どの派生段階で複合形容詞が生成されるかを形態統語的な観点から考察することで，過去分詞形複合形容詞が第一構成要素に選択する意味役割の差異を特定するだけではなく，状態受動文における動詞的あるいは形容詞的特徴の度合いを設定することができるであろうということを示す。

2. 動詞の名詞化に関する日独対照
― コミュニケーション動詞を例にとって ―

納谷 昌宏

動詞が名詞化される際，語彙概念構造（LCS）の如何なる Event が選択されるのか，これをコーパスを用いて実証的に明らかにするのが

本発表の目的である。たとえば次の例を見よう。

(1)　Er bringt das Problem zur Sprache.
(2)　*Er bringt das Problem zur Rede.

(1)と(2)が異なるのは，Sprache が非対格的な意味を有するのに対して，Rede は非能格的な意味を有するからである。動詞が名詞化される際，LCS の異なる Event が抽出されるのである。発表では，さまざまなコミュニケーション動詞について，こうした Event 抽出の実相を明らかにする。手順は次の通りである。

1　IDS と国立国語研究所のコーパスから資料を収集し，
2　動詞派生の名詞の LCS を分析することによって，
3　概念構造における Event 選択の実相を明らかにする。

この分析を通して，日本語とドイツ語の名詞化の特徴を明らかにしたいと考えている。

3. ドイツ語定冠詞の非指示的機能について
― 文法形式と意味のミスマッチ？ ―

吉田 光演

本発表では定冠詞の非指示的機能について考察する。定冠詞の意味の核は対象指示における同定にあるが，ここで指示的とは，個体や総称概念のように特定の個体や概念を話者・聞き手が曖昧性なく同定できる場合を指す。具体的には，個体表現・照応表現等である（*Duden Grammatik* 等）。他方，Kaffee dem Tee vorziehen, in die Oper gehen 等に現れる定冠詞は，同定に貢献しない，あるいは特定的でないので非指示的である。「形式的定冠詞」（関口存男）等とも呼ばれるが，意味的・語用論的に同定可能でないものが，（不定冠詞や無冠詞でなく）なぜ定冠詞によって表されるのか，未解決の点も多い。本発表では，これを定冠詞の文法形式と意味のミスマッチとして捉え，冠詞体系内の定冠詞の役割について特に以下の点で再考する。

① 項としての名詞表現は，統語的には限定詞句（DP）として認可される。限定詞句の原型は，歴史的にも（Leiss 2000, *Artikel und Aspekt*），指示的意味と関わる点でも，定冠詞にある。不定冠詞にも指示性との関連はあるが（対象導入，不定存在），数との関連が強く，限定

詞の原型とはいえない。

② 定冠詞は，指示・同定という本来の意味の実現形だけでなく，名詞表現のデフォールト形として現れ，非指示的用法へと拡張する。純粋な形式的用法での定冠詞や前置詞との融合形（am, ins, zur 等）は，限定詞句の文法形式実現と意味のずれとの間における選択・調節として捉えられる。ここでは特に，weak definites（弱定名詞句）と呼ばれる不特定表現（融合形等）に焦点を当て，定冠詞の不定性を分析する（たとえば Er geht *ins Kino*. など）。

口頭発表：文学 5（10:00～11:55）　　F 会場：104 講義室

司会：宮内 伸子，山本 孝一

1. Mentalübersetzung

― ハーマンとヘルダーにおける翻訳観の一断面

宮谷 尚実

ハーマンの著作にみられる翻訳観全体を視野に入れた上で，ヘルダーの翻訳観と比較することが本発表の目的である。

ハーマンにおいて Mental-Übersetzung とは，起点言語から目標言語へ翻訳するプロセスに位置する，いわば「頭の中での翻訳」のことである。この語は „Kleeblatt hellenistischer Briefe“（1762 年）において一度だけ使われる概念で，他の著作には用いられていない。Karlheinz Löhrer による注釈書（1994 年）でもほぼ看過されているが，ハーマンの翻訳観を知るうえでこの概念は重要である。

その約 10 年後，ヘルダーは，『シェイクスピアは翻訳不可能だろうか？』（1774 年）で自分の友人が遺したという翻訳途中の断片を紹介しつつ Mentalübersetzung に言及し，それを翻訳プロセスのなかで高く位置づけた。これは，起点言語による原文に寄り添いつつその精神を理解しようとする解釈のプロセスでもある。まだ完成したテクストとしての翻訳ではない分，たとえば，オリジナルの音声や文化などを内的に保持したままの状態で，かつ，目標言語とそれをとりまく文化へ向かう力も併せ持つ。

この Mentalübersetzung という概念を検討することにより，18 世紀における翻訳論を理解するための新たな視点を提供できればと思う。

2. 翻訳の生産力
― ハイナー・ミュラーによるシェイクスピアの翻訳と改作

村瀬 民子

ハイナー・ミュラーによるシェイクスピア戯曲の翻訳には，原文に向かい合いながら，創造的な力を駆使して作品の可能性を開拓する姿勢を，読み取ることができる。この翻訳を，原作の作品世界のみにとどまらない創造的な営みとして捉え，その生産力を考察する。アレクサンダー・カーシュニアは，ハイナー・ミュラーにおけるシェイクスピア受容を，ハイナー・ミュラー・ハンドブック（Heiner Müller Handbuch）において論じたが，この論から一歩進んで，作家自身が英語の翻訳を行ったことの意味を広範囲に論じる。

ハイナー・ミュラーの代表作『ハムレットマシーン』（Die Hamletmaschine）は，シェイクスピアの『ハムレット』を翻訳した経験をベースに書かれ，その他のシェイクスピア戯曲の翻訳経験もまた，彼の創作と緊密に結びついている。本発表では，従来あまり注目されて来なかったハイナー・ミュラー訳の『お気に召すまま』（Wie es euch gefällt）を主に取り上げる。この翻訳には，ほんのわずかな語を省略することによって台詞の印象が変化する例や，さりげなくハイナー・ミュラー自身の表現に書き換えた訳文など，独自の工夫がある。それは，創作への萌芽であると同時に，ハイナー・ミュラーが，英語という異言語に対して抱いた関心の所在をも示している。ベルリンのハイナー・ミュラー・アルキーフ所蔵の自筆メモに遺された，英語とドイツ語の交錯する表現も紹介しながら，彼の創作において翻訳の果たした役割を論じる。

3. 言語実験と翻訳の可能性
― アルノ・シュミットの記号の用法を例に

犬飼 彩乃

日本語の句読点・記号は明治以降，欧文との接触が多くなるに従い導入されていったが，日本語として定着し，独自の発展を遂げるにつれ，欧文の句読点・記号とはかなりのずれが生じた。例えば現在発表されている多くの翻訳においても，コンマ＝読点，ピリオド＝句点といった対応関係は必ずしも成立しないどころか，欧文におけるコロン，セミコロン，ダッシュなどの記号は，日本語では同じ記号として表現されることは少なく，大きな変化を経て（例えば言語化や他の記号へ

の移転を経て）翻訳されることが多い。このような，日本語でほとんど使用されないドイツ語の記号の翻訳は，どのように理解するべきだろうか。

こうした記号の翻訳を考察する極端な例として，本発表ではアルノ・シュミットの作品を取り上げる。20 世紀後半に独自の言語実験を推し進めた西独の作家アルノ・シュミットは，記号を多用することで，文章を極端に切り刻み，破壊し，また構築し直していった。シュミットは，一般的な記号の用法を大胆に押し広げ，文章中の間（ま）の規定，説明的文章の省略，ピクトグラムとしての身振りの表現などを用法のうちに含ませた。その結果，作品には，記号のみで構成されている行（くだり）も数多く存在する。本発表では，こうした記号の羅列をどのように理解するか，そしてそれらを日本語で表現することが可能なのかどうか，日本語に移転した場合どのような問題が生じるのかを探る。

ブース発表（11:30～13:00）　　G 会場：102 講義室

ポッドキャストを利用したドイツ語学習 ― プロジェクト報告

星井 牧子，野田 郁子，Ute Schmidt

外国語学習には一定の時間と反復練習が必要だが、教室での授業時間を増やすことには制約があり、学習は授業内で完結するものではないと考えると、学習者が授業外に学習できる環境を準備・構築し、自律学習を促す仕組みを提供する必要がある。ポッドキャストをドイツ語学習に利用することは、学習環境の多様化に向けた可能性の 1 つであるが、学習者の条件や要望を考慮することも不可欠である。

報告者たちは 2009 年度より、教室での学習を補完する目的で、ポッドキャスト教材を作成・配信し、学習者への調査を含めたプロジェクトを進めている。今回の発表では、早稲田大学法学部ドイツ語総合コミュニケーションコースの受講生（学部 1・2 年生）向けに、2010 年度後期および 2011 年度前期に自習用教材として配信したポッドキャストについて、1. コンセプトとデザインを紹介し、2. 質問紙調査の結果をもとに、学生の利用実態と評価を検討する。学習用ポッドキャストについては、利用方法を説明して配信しても、実際に利用する学習者が少ない点を指摘する先行研究もある。そのため本プロジェクトでは、聴解学習・モバイル環境での学習に関する意識も併せて調査している。この質問紙調査の結果についても本発表で報告する。

以上のような調査の結果と考察を踏まえた上で、日本のドイツ語教育・学習環境におけるポッドキャストの可能性を探りたい。